View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

横浜市立大学論叢社会科学系列　2011 ; Vol.62 No.1, 2, 3合併号：177－230

普　仏　戦　争　VI

― 国防政府のジレンマ ―

松　井　道　昭

第１章　兵糧攻め

ビスマルクはヨーロッパの国際情勢を重視する立場から積極的戦術を採った。彼は９月17日の英国大使マレットとの会見で次のように言う。

「パリについては、独軍はこれを数多くの軍団で包囲し、７万の騎兵団がこれを外界との連絡から孤立せしめている。もし、パリ市民がなおまだ抗戦を継続するなら、われわれはパリを砲撃するし、必要とあらば焼き討ちも厭わないであろう。」[1]

この発言は強がりでもなんでもない。“スダン”にいたるまでの連戦連勝と現下の質量両面での自軍の圧倒的優位とを考えれば、ビスマルクならずとも、だれもがそう考えたであろう。

しかし、実をいうと、ビスマルクは軍事問題に通じていたわけでもなく、プロイセン軍首脳部の意思を代弁していたわけでもなかった。軍事の最高責任者モルトケは純然たる軍事的見地からパリ攻略を考えていた。最初の鞘当て戦でパリの抵抗力が予想以上であるのを悟ったモルトケは積極的攻勢を避けるようになった。両者の意見の食い違いはのちに、ドイツ側に不協和音を生じせしめるはずである。

1　Maquest, Pierre, *La France et l'Europe, pendant le siège de Paris (18 septembre1870-28 janvier1871). Encyclopédie politique militaire et anecdotique*, 2 e éd., Paris, Auguste Ghio, 1877, xii, 838p., p. 4.

ビスマルクの楽観的見方はドイツにおける国内事情や外交関係への関心から発しており、いうならば願望的要素に基礎を置いていた。ドイツ世論は今でこそ“スダン”の圧勝に沸き立っているが、もし戦争がこのまま長びけば、一旦は影を潜めた厭戦気分がいつ再発するかしれなかった。また、“スダン”以来、防衛から侵略へと性格を転じた戦争はヨーロッパの勢力均衡に異変を告げるものとなった。それは列強とりわけイギリスから執拗な猜疑の視線を浴びており、もしこの国が戦争に介入でもすれば、これまでのあらゆる努力が水泡に帰す危険さえあった。そこで、ビスマルクは戦争をできるだけ早く終結させるためにも、即刻、パリ攻撃に取りかかることを主張したのである[2]。モルトケは当初、これに必ずしも反対ではなかった。準備が整い次第、パリ砲撃に着手するつもりでいた。スダン戦での仏軍捕虜の護送のために第11軍団、第１軍団、バイエルン軍団が本国に帰っていたが、これらの戦線復帰を待ってパリ攻撃をおこなうつもりでいた。攻撃は９月28日ごろを予定していた[3]。また、９月９日付の陸軍大臣ローン宛ての書簡でも、「おそらく９月25日から30日の正午までの間に、パリに向かって峻烈な攻撃が開始されるであろう」と述べている。ランスReimesでおこなわれた軍首脳会議で要塞砲兵の招致を決めている[4]。

このように、スダン戦を終えた当時のモルトケがいくぶん楽観論に染まっていたことは否定できない。彼は首都の開城を促すのに簡単な攻撃で十分であると信じていた。９月10日に彼は、「敵の首都の占領が幾らか早まること」を予測している[5]。モルトケは『回想録』で次の主旨のことを書いている。

「パリに総数30万の防衛軍がいた。この地の攻撃にでかけてきたわが

2　エーリッヒ・アイク（吉田・新妻訳）『ビスマルク伝』第５巻、ぺりかん社、1997年、p.221.

3　９月８日付『軍事通信』。

4　『軍事通信』第267号。

5　『軍事通信』第269号。

軍勢のちょうど倍の数だ。そのうち、［30万のうち］124個砲兵中隊と5千の騎兵の支援を受けて野戦に投入できるのは6万しかいない。…［中略］…最大の困難は、長短期の差こそあれ200万の住民を扶養するに足りる食糧を備えなければならないということだ。」[6]

また、12日には別人宛てに書いている。

「高まっている不安に関する情報がパリからここへ到達している。裕福で地位ある人々は避難しているように思われる。共和政府は駐屯軍の将校たちによって無条件に承認されていない。すなわち、諸部隊の内部では無規律が蔓延している。このために決戦が始まるかどうかは疑わしい。それはともかく、われわれは重砲を招致し、戦闘の準備を整えている。」[7]

ここに、モルトケの状況判断にニュアンスが認められる。つまり、積極的攻勢をかけるまでもなく、パリは自壊するのではないかという判断がそれだ。これを促したのがスパイ、捕虜、その他がもたらす情報である。9月19日に大本営はモーからフェリエールに移っていた[8]。この日、パリ軍とのあいだに最初の衝突が起きた。これはパリ側からの攻勢で生じたものである[9]。戦闘能力なしとみたパリ軍が積極的攻勢に出たこと自体がモルトケに意外な感じを与えた。心してかからなければならない――今後、攻撃するに際してはパリ内部の情報を十分集めたうえでなければならない、と肝に銘じたのである。

しかし、引きつづき彼のもとに届く情報は敵の自壊作用がかなり進んでいることを告げるものばかりだった。こうしてモルトケは首都がやがて陥

6　Moltke,Helmuth de, *Mémoires du maréchal H. de Moltke, La guerre de 1870*, Ed. française par E. Jaeglé, Paris, H. Le Soudier, 1891, iii, 499 p., p. 150.

7　『軍事通信』第272号。

8　大本営をフェリエールのロチルド邸に移設したのである。

9　松井道昭「普仏戦争Ⅴ―籠城のパリ―」(『横浜市立大学論叢』人文科学系列、第62巻第2号収録)

落するであろうという楽観的見方にたち戻る。自壊作用を促すため９月末に砲撃を開始しようとした。しかし、これは結果的に延期された。ロレーヌの小都トゥールToulが陥落し（９月23日）、本国からの鉄道連絡が確保されたからだ。かくて、同じ砲撃をおこなうのであれば、万全を期し本国から攻城砲を運んできてからにしたほうがよいと考えるようになった。9月27日付ブルメンータール宛ての手紙は、「われわれは攻城砲の到着を待つであろう」と書いている[10]。

ところが、この攻城砲がなかなか到着しない。フランスの鉄道輸送力があまりに弱体だったからだ。ヴェルサイユに大本営が移ったのちの10月６日にも、本国の貿易大臣イツェンブリッツ伯爵に催促する[11]。モルトケにしてみれば、フランスがこれほどまでに粗末な鉄道輸送力しかもっていなかったことは失望というより、おそらく驚きであったに違いない。このあたりから彼の心境に変化が生まれ、積極攻勢よりも兵糧攻めに傾く。

モルトケの心中で膨らみつつある懸念は補給問題であった。当座は全面攻撃を手控えるとしても、二十数万の自軍の補給を無視できない。弾薬や食糧を４百キロメートル以上も離れた本国から運ばねばならなかった。当然、鉄道輸送ということになるが、ここに思わぬこと、すなわちフランス鉄道の輸送力の弱体という問題が生じてきたのである。こういうわけで、不用意に攻撃を仕掛けることによって敵の頑強な抵抗にでも遭えば、攻撃側のほうが補給面で窮地に立たされる危険性がある。かくて、モルトケは独軍の通信線が確保されないかぎり積極的攻略は採るべきではないと考えるにいたった。

彼にはもうひとつの懸念があった。メッス籠城軍の動静である。9月27日にストラスブールが落城。次はメッスの番だ。この軍都には18万の大軍が蟠踞している。兵糧攻めをすれば必ず敵は早晩――ストラスブール攻略

10　『軍事通信』第298号。
11　『軍事通信』第317号。

より時間はかかるだろうが――自ら白旗を挙げて出てくるか、さもなければ決戦を挑んでうって出てくるかのいずれかであるとみた。メッスの兵力は侮りがたく、これを片づけるまでパリ攻略は慎重であらねばならない。もしパリでの戦いが膠着状態に陥ったところにメッス軍が駆けつけてくるようなことでもなれば、敵の挟撃に晒されるはめになる…[12]。

モルトケ戦略は硬軟両様の対応を本質とした。ナポレオン戦略と同じく会戦主義、戦場での主導権掌握、機動力重視の立場をとるといっても、いかなる場合にも攻勢をかけるというわけではなく、準備の整わない攻撃を軽挙とみなす。戦略的に配置された要塞というものは一般に、寡少の兵員でも十分抵抗できるようにしてあり、これを攻略するためには、考え抜かれた作戦と圧倒的に優勢な兵力を必須とした。攻略は、それを急げば急ぐほど味方にも被害が出るのを覚悟しなければならなかった。小さな要塞を攻略するにも守備兵の何倍もの兵力を要するのに、20を超える外部要塞でもって防護されたパリのような巨大都市の攻略となると、おいそれといかないのは当然である。

モルトケはもともと、人口5万以上の町を攻略する場合、持久戦にもち込めば籠城側が自らの重みで自壊するはずとの確信をもっていた。睨み合い状態のうちに時間のみが経過するということは敵味方に公平な負担とはならない。糧食補給の途を断ち切られた籠城側の負担のほうが大きい。ましてや、パリのような大都市の場合、わずか1日を維持するだけでも膨大な食糧を消費する。あとひと月もたてば必ず敵は白旗を掲げるにちがいない、と。そうでなければ、持久戦に焦れたパリの革命派が権力を奪取し、出撃戦に打って出てくるはずだ。降伏、出撃のどちらにしてもモルトケの思うツボである。そこで、彼は攻撃の用意が整うまで兵糧攻めで圧力をかけようということに決めた。反面、モルトケが楽観論にとらわれていた証拠に、ストラスブールやメッスの攻略戦でおこなったような万全な防御陣

12　戦略研究会（編）『戦略論大系 3』芙蓉書房出版部、2002年、339p., p. 118.

地をパリでは築かなかった[13]。

モルトケがパリ攻撃に慎重であった理由は『回想録』にも詳細に書かれている。

「実を言うと、外部から支援を受けない町というのは、単純に包囲を続けるだけで降伏に追い込めると、人は考えがちである。しかし、そうした結果を見るまでには数ヵ月を要する。もしそれを早めたければ他の手段に拠らなくてはならないであろう。もっとも単純な方法は砲撃である。

パリが要塞化されたとき、包囲側の砲台は改良を加えて射程距離を2倍ないし3倍にしなければならない、…［中略］…

なぜドイツ参謀本部は砲撃手段に訴えるのに手間どったのか、と人は非難する。それはおそらく、この措置がもたらす諸困難を考慮に入れていないがゆえの疑問である。

国家の内部に位置する巨大な要塞を砲撃するのは絶対的に不可能であるといわざるをえない…。」[14]

彼は兵糧攻めについて揺るぎない勝利への確信をもっていたものの、別の種類の危惧をいだいていた。

ひとつは、包囲作戦が奏効し、パリをギリギリの飢餓状態に追い込んだ場合の懸念がそれである。とにかく敵が出撃してきて、その結果、早く降伏してくれれば問題はない。しかし、包囲戦が極端に長引いた場合、2百万の住民に強いられる飢餓状態が問題となってくる。フランスの不十分な輸送力では、自軍の糧食補給こそどうにか確保できるかもしれないが、パリ住民のものまでとなると、そう簡単にできるものではない。その意味でも相手をできるだけ早く決戦に引きずり込む必要があった[15]。

13　Moltke, *Mémoires, op. cit.*, p.150.
14　*Ibid.*, p. 151.
15　*Ibid.*, p. 439.

もうひとつの懸念は地方の抵抗である。かつてのフランス革命時のナショナリズムがそうであったように、相手に巨大な反撃力を与え、戦争の長期化をもたらしはしないだろうか。

しかし、これら2つの危惧がビスマルクやモルトケなどプロイセン首脳部の脳裏をよぎったが、9月末の時点ではまだ深刻な問題ではなかった。戦争はあとひと月そこらで決着がつくはず、つけてみせると考えていたからだ。ところが、現実が描く軌跡はこうした懸念どおりの展開となるのである。プロイセンの英傑たちでさえ、戦争ではあらゆる楽観論を排除しなければならないという鉄則を軽くみていたことになる。

第2章　フェリエール会談

第1節　ファーヴルの思惑

飢餓と戦争長期化の問題はフランス側にとっても深刻な問題であり、国防政府にとって焦眉の懸案であった。

国防政府はその誕生のときから単一の意思にまとまっていたのではない。表向きは徹底抗戦を唱えつつも、無謀な抗戦を危惧する閣僚がほとんどであった。最後まで戦い抜く決意を固めていた閣僚はガンベッタのみであった。彼自身は、地方で抗戦組織を立ち上げるという名目で、体よく首都パリから追い払われるのである。包囲された町を気球で脱出した彼は愛国の使命感に燃えており、同僚たちの厄介払いの意図を感じとっていたわけではないだろう。

無謀な戦争の早期終結を願うジュール・ファーヴルは、フランスが深傷を負わないうちに名誉ある停戦への道を模索していた。そもそも戦争を始めたのは帝政だが、その帝政が今や存在しない。そうならば新政府がこれ以上戦争を引っ張る理由はない、というのが彼の偽らざる心境だった。ファーヴルの計算によれば、まだ新政府のもとで本格的な会戦を交えていない今、プロイセン政府に和平提案をおこなえば、相手もむげに厳しい条

件を突きつけはしないだろうが、相手に深手を負わせてからの交渉では、講和条件の嵩上げを招くのは必至となるだろう。

だが、政府首脳部とパリ市民とのあいだに横たわる認識ギャップを考えると、決戦回避の選択は理に合わない企てでもあった。徹底抗戦を旗印とする新政府がまだ一発の銃弾も発射しないうちに和平行動にうって出るとは、真面目に抗戦を願う市民はむろん、事件の推移を見守る中立国をすら納得させるのは難しかった。プロイセン側の和平条件を知るため、とにかく交渉に飛び出さなければならないとするならば外務大臣ファーヴルではなく、政府の意を受けた閣外の他者あるいは中立国であったほうがよかったであろう。しかし、その場合でも、フランス側が和平の意図をもっているだけで、ドイツ側は相手の弱腰を悟り条件を嵩上げしてくるのは避けられない。

こうした後知恵の判断はともかく、われわれは実際に生起した事実のほうを直視しなければならない。ファーヴルは英国大使リヨン卿の仲介により、密かにビスマルクとの会見を企てた。ファーヴルが同大使に仲介を依頼したのは9月9日のことで、国防臨時政府が産声を挙げてわずか数日後であったことに注目しておきたい。

第2節　ビスマルクの狙い

ビスマルクはまったく異なった見方をしていた。今度の戦争で宣戦布告を仕掛けてきたのはフランスであり、プロイセンは“エムス”で売られた喧嘩を買ったまでのことだ。一定の見返りがないかぎり、おいそれと和平に応じるわけにはいかない。究極目標は賠償金でもなければ、領土の割譲でもなかった。たしかに、それらは目的の達成過程での余禄となりうるだろうが、それ自体が目的であるわけではない。ビスマルクの狙いは、今度の戦争で行動を共にしてきたドイツ諸国とともに悲願の統一国家を建設することにあった。それゆえ、すべてのドイツ人を誘って一気に国家建設に突き進めるような赫々たる勝利をおさめないかぎり、そして、フランスに

ドイツ問題への干渉を今後いっさい断念させ、同国から事後もこれを保証するような約束を取りつけないかぎり、この戦争を中途半端なかたちで終わらせてはならなかった。だからこそ、ビスマルクがファーヴルとの会見でもちだした講和条件はフランスにとってきわめて厳しいものとならざるをえなかったのである。

ビスマルクは会見の申し込みに喜んで応じた。二重の利点が感じられた。ひとつは、パリ政府の新しい指導者を値踏みしパリ内部の事情やその抵抗力を推し量る好機となりうることである。もうひとつは、いつでも和平会談を開くための窓口を設けることになったことである。

もとより、ビスマルクの目標はフランスを滅ぼすことではなく、フランスを仮想敵国とすることによってドイツ諸国およびドイツ人の結合を図ることであった。だから、相手とは厳しい敵対関係を維持すると同時に、いつでも交渉に応じる柔軟な態度を保持する必要があった。このことの裏を返せば、やがて誕生するはずのドイツ国家は、いうならば姑息な外交的手段に訴えねばならないほど自力生長力に欠けていたということだ。

当時のビスマルクがプロイセンの代表として必ずしもフリーハンドではなかったことを指摘しなければならない。つまり、彼は純粋に外交的立場から和平問題を考えるには、あまりに多くの重荷を背負わされていた。そうした重荷はもっぱら軍部がもたらしたものである。クラウゼヴィッツ軍事学の優等生たるモルトケはビスマルク外交を一方で高く評価しつつ、他方では訝しい眼で見つめていた。師クラウゼヴィッツの教えに従えば、敵は叩くべき時に徹底して叩いておかねばならない[16]。たしかに、クラウゼヴィッツの教えるところの、「戦争は政治の一手段である」という原則は正しい。そうであるがゆえに、敵の報復能力を完全に奪い取ったのちに和平にもち込まねばならない。中途半端な勝利でもって我慢し、それゆえに後

16　クラウゼヴィッツ（淡徳三郎訳）『戦争論』、徳間書店、1965年、422 p., pp. 18～19

でしっぺ返しを食らったのでは、いったい何のための戦争であったかわからなくなる。

ビスマルクが政治の立場から軍事を考えたのとちょうど反対に、参謀総長モルトケは軍事の立場から政治を考えた。政治と軍事が二人の英傑に分担されている事実がそこに認められる。本来、不可分のものを複数の者が指揮する場合の軋轢がそこにある。

この矛盾は普墺戦争の“サドヴァ”で露呈した。このときモルトケは敵地ウィーンの進駐で高らかな勝利宣言をなすことを主張し、ビスマルクは戦後の外交政策を進める立場からそれに反対し、オーストリアに温情的な講和条件を課すにとどめることを主張した。これはビスマルクの自らの地位をかけた必死の説得で国王を動かし、彼の主張どおりの「限定的勝利」の結果に終わったが、これは、その後のビスマルクとモルトケら軍部との間の隠然たる不和の因となった。軍人たちは、国王への上奏というかたちでビスマルクが自己の意思をゴリ押ししたことを不快に感じていた。モルトケは、現下の戦争での対仏交渉においてビスマルクが弱腰になりはしないか、そして、外交術優先に名を借りて軍事問題に介入するのではないかを極度に警戒した。モルトケは軍事に自負をもっていただけに、ビスマルクの口出しを嫌った。軍事問題で国王の裁断を仰ぐとき、モルトケはつとめてビスマルクの不在時を選んだ。彼は、ビスマルクが国王を扱う手並みの見事さを知っていたからである[17]。

ビスマルク自身、軍部の危惧を知らないわけではなかったから、対仏和平交渉で中途半端な妥協で済ますわけにはいかなかった。普墺戦争の“サドヴァ”は普仏戦争の“スダン”である。スダンでの大勝利で大勢を決したのだから、これ以上の敵対関係の持続は戦後ドイツ外交にとって有害な影響をもたらす恐れがある —— ビスマルクがこう考えたとしても何ら不思議ではない。しかし、その一方で彼は、この勝利から大きな褒美を引き

17　エーリッヒ・アイク（吉田・新妻訳）『ビスマルク伝 5』ぺりかん社、314 p., p.218.

出せないならばドイツ統一の宿願が達成できないことになる、したがって、統一運動の持続的推進のため大勝利が明らかになるまで対仏戦争を継続しなければならないと考えていたことも事実である。ここにジレンマがあった。このジレンマが解消できるかどうかは、挙げてフランス側の態度いかんにかかっていた。ビスマルクは、ファーヴルが譲歩すれば和議に進めばよいし、その態度が頑なであれば戦争続行あるのみ、とにかく相手の出方をみよう、と心に決めた。

第３節　フェリエール会談

ビスマルクがファーヴルの会見申込みに返答するのに１週間を要したのは、パリ包囲が完成するのを待っていたからだ。ようやく９月16日になって、ファーヴルは英国大使を介してビスマルクからの返事を受け取った。ファーヴルの行為はまったくの隠密行動で、政府閣僚のほとんどがこの冒険行動を知らなかった。トロシュ総督すらこの会見を知らなかった。知っていたのはル・フロ陸相、そして、閣外の大物政治家ティエールの２人だけだった。

かくて、9月18日の日没を待ってファーヴルは従者５人とともに、日除けシートのすべてを下ろした馬車に乗り込み、シャラントン門からパリを離れた。一行を乗せた馬車は門を出ると、待ち受けたプロイセン兵士に護衛されてパリ郊外のメゾン＝アルフォールとクレテイユを通り、ヴィルヌーヴ＝サン＝ジョルジュ村に到着。ファーヴルは道中、焼け落ちた民家を目撃し、プロイセン軍の行進にも出会した。ファーヴルは18日夜をここで過ごす。ファーヴルは、当時ドイツ軍本営の置かれたモー Meauxにいるビスマルク宛ての手紙で一行の到着を伝えた。ビスマルクは返書で、翌19日午前にモーで会見したいと伝えてきた[18]。

18　Favre, Jules, *Le gouvernement de la Défense nationale du 30 juin au 31 octobre*, Paris, Henri Plon, 1871, 467p., pp. 156-162.；Bondois, Paul. *Histoire de la Révolution de*

話は前後するが、ビスマルクがフェリエールの城館のプロイセン王を訪れたとき、王の意向でドイツ軍本営はすでにモーからそこに移っていた。ここは大富豪ロチルド侯爵の邸宅である[19]。ビスマルクは会見地を変更し、ファーヴルら一行をこの城館に案内させた。ビスマルクとファーヴルの会談はこの地名をとって、「フェリエール会談」といわれる。それは19日と20日の２日間にわたり計３回行われた[20]。

ファーヴルはビスマルクのきわめて慇懃な応対に接したものの、この宰相から突きつけられた和平条件は過酷なものであった。最初に話題にのぼったのはゲリラ兵の取扱い問題である。ビスマルクはゲリラ兵を殺人者と見なし、捕縛と同時に射殺に処すると宣告した。一方のファーヴルは1813年のプロイセン民兵勅令を引き合いに出し、民兵や義勇兵に関しては、そうと識別可能な記章を付けている場合には軍事力の一部として見なされるべきであると主張した。1813年といえば、ヨーロッパでナポレオン支配から脱しようとする解放闘争が行われている最中である。単なる殺人者ならば、たとえ彼らが投降の意志表示をしても射殺は当然のこととなり、また、軍事力の一部と見なされる場合には、兵士が投降の意志表示をすれば、国際法に基づく処遇が必要となる。国際法といったが、1870年には20世紀の「ハーグ協定」のようにはっきりと条文化されてはいないものの、国際法上の原則的な部分ですでに合意ができていた。ファーヴルによれば、ナポレオン戦争ではプロイセンのゲリラ兵は立派な兵士として遇されたのではないかというわけである[21]。

1870-71 et des origines de la Troisième République (1869-1871), Paris, Alcide Picard et Kaan, 1888, xi, 468p., p.141.

19　フランスのロチルド家の邸宅で、その敷地は３千ヘクタールもある。1829年、ジェームズ・ド・ロチルドがフーシェ家から買い取った敷地に邸宅と庭園を造成した。完工は1859年で、その３年後にナポレオン三世を招待したことがある。

20　Guérin, André, *La folle guerre de 1870*, [Paris], Hachette, [c.1970], 333 p., p.144; Georges-Roux, *Op. cit.*, p.157.

21　エーリッヒ・アイヒ『ビスマルク伝　5』前掲書、pp.219～220；Guérin, *Ibid.*, p.145.

「それはちがう」、とビスマルクは反論。「往時のフランスはわが国の愛国者たちを暗殺者として遇したのだ…［中略］…わが国の森の樹木には、貴国の将軍たちがそこに吊した住民の痕跡がたくさんありますぞ。」[22]

この論争はほんのジャブ程度の応酬にすぎなかった。本題は和平問題である。ビスマルクのもち出す条件の第一は、独仏の敵対関係に終止符を打つためという名目でのアルザス州全体とロレーヌ州のうちメッス要塞およびその他の要塞の明け渡しであった。第二は、休戦協定の締結のためにストラスブールの開城とパリの外部要塞モンヴァレリアンの割譲であった[23]。このときのやりとりについてファーヴルは次のように書きとめる。まずファーヴルが口火を切る

「パリの城内で決戦をおこなう前に、測りしれない不幸を予防すべく名誉ある交渉を試みるのは可能ではないか、と私は信じます。そこで、この点に関して閣下のご意向をご教示願いたい。いささか不正常とはいえ、わが方の状況はきわめて明瞭であります。われわれは皇帝の政府を打倒しました。その政府は自壊しました。権力を掌握するにあたり、われわれはひとつの現下の絶対必要命令に従うのみであります。政体に関してどんなものが自らにふさわしいか、そして和平条件について何が望ましいかを宣言するのは国民の仕事であります。こういうわけでわれわれは議会を招集しました。そこで、私は閣下に以下の質問をするためにここに参上いたしました。あなたがたはわが国民に何かを諮ろうとする意思をおもちであるかどうか、あなたがたはわが国民を滅ぼす意図のもとに、あるいはそれにひとつの政体を課そうとする意図のもとに、わが国民に挑戦なさるつもりかどうかを伺うために。」[24]

ビスマルクは答える。

22　Guérin, *Ibid*.; Favre, Jules, *Gouvernement de la Défense nationale du 30 juin au 31 octobre 1870*, Paris, 1871, 464 p., p.165.

23　Georges-Roux, *Op.cit*., p.157.

24　Favre, *Op. cit*., p. 159.

「私はひとえに平和を求めております。平和を乱したのはドイツではありません。貴国が理由もなく一方的にわが国の領土の一部を奪取しようとの意図のもとに、われわれに宣戦したのです。ドイツがこの機会を求めたのではありません。ドイツは自らの安全のために、この機会を捉えたのです。ストラスブールはわれわれにとって恒久的な脅威となっております。これは家の鍵のようなものであり、われわれはこれを貰い受けます。」[25]

アルザス＝ロレーヌ問題が、すなわち、20世紀までもち越されることになる仏独確執の根としてのアルザス＝ロレーヌ問題がすでにこのとき浮上している。ドイツ側に両州の割譲の意図がいつごろ生まれたものであろうか。

8月21日付けのロンドン駐在大使ベルンシュトルフ宛ての訓令で「われわれを脅かしている幾つかの要塞を取り壊すというのではなく、その幾つかをわれわれに譲渡させる」と述べる。ここに暗に仏領の一部の割譲が示唆されているのだ[26]。9月4日のモーリツ・ブッシュに対して、9月6日のコイデルに対しての発言で、ビスマルクはアルザス＝ロレーヌの獲得は「政治的に望ましくない」が、フランスが次回の攻撃戦争を始めにくくするには、ストラスブールとメッスの両要塞を所有することが必要だと言った。9月12日の国王への報告書では、首都パリが陥落していなくても「可能なかぎり早急に占領し、強力な管理下に置くことが政治的に非常に重要であると考えます。…［中略］…その州を我がものにするという意思をその州の住民にも外国にもいよいよ明確に示すことになるでしょう」と述べる。実のところは8月21日の時点で、ロレーヌのサールブール、シャトサラン、

25　Assemblée nationale, *Enquête parlementaire sur les actes du gouvernement de la Défense nationale, op. cit*., tome 1, pp.387-389; Guérin, *Ibid*., p.146.; Favre, *Op. cit*., pp. 165-166.

26　Bismarck, *Die Gesammelten Werke* (*sogen, Friedrichsruher Aus gabe*), 15, in 19 Bdn, Berlin, 1924ff., 6b, 455.

ザルゲミューデ、メッス、ティオンヴィル郡を、アルザスの両県とともに「エルザス、ドイツロートリンゲン総監督区」にすると布告したときに、両州の併合はすでに決定していた。要求がロレーヌの鉱山地帯にまで拡大したのは後のことである[27]。

要するに、プロイセン首脳部にアルザス割譲が念頭にのぼったのはグラヴロットの戦いからスダンの戦いまでのあいだということである。ここで重要なのは、アルザスの奪取が戦前からもくろまれたものではなく、戦時中に育まれたということである[28]。さらに、アルザス＝ロレーヌの割譲が歴史的、文化的あるいは法制度的な理由ではなく、純然たる軍事的な理由に基づいて、しかも、宰相ビスマルクによって企図された点においてである。ストラスブール、メッス、サールブール、シャトー＝サンリス、ティオンヴィルの要塞はドイツの喉元に突きつけられた短刀のようなもので、フランスはこれらを根拠地として易々とドイツへの侵入をおこないえた。これら要塞がドイツの手中に入れば、今度はドイツを守る斜堤として、あるいは予防戦争の観点からも戦略上の橋頭堡として十分機能することが期待できた。

ファーヴルはビスマルクに向かって言う。

> 「閣下が望んでおられるのはフランスの破滅ということになります。したがって、あなたが衝突するのはフランス人民全体ということになりましょう。われわれに議会を招集させていただきたい。この議会は正式の政府を指名するでしょうし、その政府があなたの条件を評議するでありましょう。」[29]

ビスマルクは返す。

27　エルンスト・エンゲルベルク（野村訳）『ビスマルク―生粋のプロイセン帝国創建の父』、海鳴社、1996年、798p., p.687.

28　Guérin, *Ibid*., p. 146.

29　Assemblée nationale, *Enquête parlementaire sur les actes du gouvernement de la Défense nationale, op. cit*., tome 1, p. 389; Guérin, *Ibid*.; Favre, *Op. cit*., p.169.

「だが、そのためには休戦協定が必要です。私はそれを絶対に認めません。」[30]

落胆顔のファーヴルを見てビスマルクは付け加えた。選挙に関しては完全に自由な選挙を保証するが、アルザスとロレーヌは選挙から除外しなければならない、代議士たちには通行証を発行し、パリへの糧食補給をおこなうことを承認する、と[31]。

ファーヴルの淡い期待はたちまちのうちに消し飛んだ。ビスマルク提案に接したときの印象について、ファーヴルは「身の竦む思いがした」[32] と語る。ビスマルクの要求は無条件降伏とほとんど変わるところがなく、どれひとつとして受け容れられそうになかった。もう少し穏やかな条件ならば国防政府の閣僚とパリ市民を説得できたかもしれない。そもそも今回の行動は半ばファーヴルの独断行動であり、閣僚と市民にこの条件を正面からぶつけて同意を得ることなどとうてい望めそうになかった。国防政府に課された責務は抗戦であって敗戦処理ではなかったはず、彼はしだいに交渉続行の無意味さを感じていく。

フランスにとって堪えがたく、辱めにも等しい条件は呑めないと悟ったファーヴルは交渉の打ち切りを決めた。フランス政府にドイツ側の諸条件を伝えることは約束する、受諾の意思ある場合はフェリエールに戻ってくるという言葉を残してファーヴルは辞去した。

第４節　交渉決裂後

ファーヴルは重い足取りでパリに戻ってきた。そのとき政府の閣僚たちは、パリ近辺での最初の戦闘となったシャティヨン事件について善後策を協議していた。そんなところにファーヴルが舞い戻ってきたのだ。彼は閣

30　Guérin, *Ibid*.

31　Assemblée nationale, *Enquête parlementaire sur les actes du gouvernement de la Défense nationale,op. cit*., tome 1, p. 389; Guérin, *Ibid*.

32　Favre, *Op. cit*., p. 188.

僚たちにフェリール会見の一部始終を伝えた。すぐに、ビスマルクの提案は承服しがたいという点で全員が一致した。フランス側がかたちのうえだけでもドイツ側の和平提案を退けたとなると、ヨーロッパ世論に向かって事情説明をおこない、抗戦継続の責任が挙げてドイツ側にあることを訴えなければならなくなる。ジュール・ファーヴルは政府への報告書というかたちでフェリエール会見記を起草した。

「ビスマルク氏は和平の担保としてストラスブールを要求した。そして彼の要求について私がその前に議会…［中略］…がパリに招集されるべきであると述べたとき、彼はそれに応じるためには、パリを一望できる要塞、たとえばモン＝ヴァレリアン要塞をよこせと言ってきた。

私は彼の発言を遮ってこう言った。『われわれにパリそのものを要求したほうがより簡単でしょう。あなたはなぜ、フランスの議会があなたがたの大砲の監視下で討議することにこだわるのですか』、と。

『別の取り合わせを模索しましょう』と、彼は私に答えた。

私は彼にトゥールでの議会招集を提案した。これならば、パリにおける議会招集のような担保を必要としないからである。

ビスマルクはそれについて国王の意見をうかがってみると述べた。…［中略］…彼は15分後に戻ってきた。国王はトゥールの件は承認したが、その条件としてストラスブールの守備隊を捕虜にとることを主張した。」[33]

9月20日の「政府宣言」はこう述べる。

「国防政府が、名誉と危険の伴う持場におかれた路線の放棄を望んでいるという噂が広がっている。この路線とは次のような文言において公式化されるものである。

33　Favre, *Op. cit.*, pp.185-186.; Sordet, Felix, *1870-71 ou une page d'histoire: Administration et Guerre*, Chalon-sur-Seune, S. Montalan, 1873, 452 p., p. 211.

『わが国土の寸土、わが要塞の一石といえども譲らない。』

政府は最後までこれを堅持するであろう。　パリ市役所にて、1870年9月20日」[34]

9月24日、トゥール派遣部も諸県に向かって次のような宣言を発した。

「パリ包囲前にジュール・ファーヴル氏は敵情査察のためビスマルク氏と会見した。以下に掲げる宣言は、この和平提案に対する敵方の返答がどんなものかを示した。

プロイセンは戦争続行を望み、フランスを第二級国家に陥れることを望んだ。

プロイセンは占領権に基づき、フランスからアルザス州とメッス以東のロレーヌ州の割譲を要求した。

プロイセンは休戦協定の同意の条件として、敢えてストラスブール、トゥール、モン＝ヴァレリアンの各要塞の予備的開城を要求した。

このような無謀な要求に激怒したパリは、屈従するよりは廃墟として朽ち果てるほうを選んだ。かくも無礼な要求に対しては徹底抗戦に訴えるのみ。フランスはこの戦いを受け、そしてそれを支えるべく、あらゆる祖国の子らの愛国心に訴えるものである。

クレミュー、グレ＝ビゾアン、フリション」[35]

ビスマルクはファーヴルの「会見報告書」に故意の言い落としがあることを直ちに抗議したが[36]、それはこの際どうでもよかった。世論の圧力を受けていたパリ政府にとって交渉での多少の粉飾は避けられなかったからである。ここで重要な点は双方に和平条件をめぐって埋め難い溝があったことである。ビスマルクはもちまえの率直な性格からして、交渉の手練手

34　*Le Journal du Siège de Paris*, publié par Le Gaulois, Paris, 1871, 476 p., p. 23.

35　Sordet, *Ibid*.

36　Maquest, Pierre, *La France et l'Europe pendant le siège de Paris, (18 septembre 1870 -28 janvier 1871) Encyclopédie politique militaire & anecdotique*, 2 e éd., Paris, Auguste Ghio, 1877, xii, 838p., pp. 38-39.

管の立場から条件の嵩上げをしたのではなく、自らが適当と思う和平条件をそのまま提示したまでのことだ。ビスマルクにしてみれば、普墺戦争の締め括り方において中途半端さがあり、それがプロイセン軍部に不満が残った以上、今度の戦いでは徹底した勝利と完璧な講和が避けられないと悟っていた。

交渉が暗礁に乗り上げたのは、むしろファーヴルのほうに甘さがあったからである。つまり、敵がパリ包囲を完了し、今まさに侵入を始めようとするやさき、情状酌量を求めるような態度での交渉――バーゲニングパワーを欠いた状態での交渉――では、よほどのことがないかぎり相手が乗ってこないのは明白であった。パリ政府にとって頼みの綱はヨーロッパ列強による仲裁である。そのために、「フェリエール会見」の直前にティエールが政府派遣の特命大使としてパリを発ち諸国を行脚中であった。もし中立国介入の徴候でもあれば、「会見」はまた違った進展を示したかもしれない。仲裁を買って出る国が皆無という状況下での「会見」に相当の無理があったのは否めない。

プロイセンで「会見」は大きな反響を巻き起こしていた。ビスマルクもプロイセン側の公式見解を発表しなければならないことを悟った。『北ドイツ通信』において会見の模様を発表したが、そのなかで宰相は、ファーヴルがパリの共和主義新政府から何ら公的委任を受けていなかった事実を挙げるとともに、その新政府は真摯に和平を求めるどころか徹底抗戦に執着したと述べた。

ジュール・ファーヴルは「通達」で声高らかに反論し、相手の容赦ない態度を非難した。

> 「われわれは歴史を前にしてわれわれが拒絶したという責任を引き受けよう。われわれの見るところ、プロイセンの無茶な要求に反対しないことはひとつの裏切りにほかならない。どんな運命がわれわれを待ち受けているかを私は知らない。しかし、私が熟知していることは次のとおり。フランスの現況とプロイセンのうち、いずれを選ばねばな

らないとすれば、私が追求すべきは前者の立場であることだ。わが敵の剛直にして残酷極まりない野心に屈するよりは、わが煩悶、わが危険、わが犠牲のほうを私は選択するだろう。フランスが勝利をおさめることを私は確信している。たとえ敗北するようなことがあろうとも、フランスはなおその不幸においてもあまりに偉大であるため、世界中の賞賛と同情の対象でありつづけるだろう。そこにこそ真実の力があり、そこにこそおそらくは復讐が宿るであろう。」[37]

良識ある人々は皆、ジュール・ファーヴルの言わんとするところをよく理解した。皆が託す一縷の望みというのは、無謀な要求をパリに突きつけるプロイセンに対して世界中の同情を買うことだったし、プロイセン軍が長期の戦いから厭戦気分に追い込まれるということだった。

だが、パリ市民はもっと強気であり、敵を物理的に負かせるものと信じていた。今の国防政府を取り換えるという条件つきであったが。いずれにせよ、場末の労働者たちは徹底抗戦を唱えていたし、彼らの神経はきわめて高ぶっていた。「下層民」はとにかく好戦的であった。目立った激突がなく、籠城の消耗感がじわじわと出てきたところから、しだいに自分らは担がれているのではないかと疑いはじめた。こうした時間の空費は故意のものではないか、敵と味方指導者の共謀のうちに密かにパリの開城が画されているのではないかと思うようになった。すでにパリに敵の密偵が侵入し、いたるところで民衆たちの動向を窺っているように思われた。

人々はちょっとした言葉の鈍り、眼と毛色の違いに神経をそばだてた。一方で、自分自身が疑われる可能性もあった。スパイの嫌疑を避けるためには、検問で尋問された際はスラスラと喋ること、もし国民衛兵につかまったときは進んで兵営に同行することだとされた。銃を構えた4人の兵士に囲まれつつ、パリ市内を横断することを決して恐れてはならないのである。むしろこのほうが安全だった。民衆に、前後の見境なく容疑者を襲う恐れ

37　Dominique, Pierre, *Le Siège de Paris*, Bernard Grasset, [c.1932], 316 p., p.79.

があったからである。情報不足がこのような疑心暗鬼の発生源であったのは言うまでもない[38]。

度を越した戦意は狂躁につながり、人々の喜怒哀楽は激しかった。叫び、歌い、涙し、崇高さの極致に達したかと思えば、次の段には信じられないほど下卑た態度に豹変する。9月20日、パリ郊外の前線を超えた一人の畑泥棒が小便中のドイツ人歩哨を襲い、銃を奪ったのち、背中からズドンと一発見舞ってしまった。彼は気の毒なこの犠牲者を仏軍前哨まで引き摺ってきた。たちまち彼は時の英雄となった。その翌日、膝まで延びた将校服を着用し、深い大佐軍帽で鼻までを被ったこの男は凱旋将軍さながらに行進を開始する。彼の後ろにはゾロゾロ長い行列がつづき、それは歓喜の声を発しながらバスティーユからマドレーヌまで達した。パリは衰弱するどころか、日増しに熱気を帯びてきた。憤激に燃え立つこの民衆の上にたつ政府はこれを見ても動かず、凍りついたままであった[39]。

また、9月下旬の市内で奇妙な光景が繰りひろげられた。シャティヨンの戦闘から逃げ帰った兵士の一団が街路を行進した。両手が縛りつけられ、軍用外套が裏返しに着用し、軍帽を前後逆様に被っていた。彼らの背中にはそれぞれプラカードが括りつけられていたが、それには各人の名と「敵前逃亡した臆病者！」という文句が書かれていた。遊動兵と国民衛兵らがこの不幸な一団の両側で人垣をつくった。女たちは彼らに唾を浴びせた。

パリ市民は籠城戦が長びくとはまったく考えていなかった。おそらくプロイセン軍は早晩、総力を挙げて突入するにちがいないとみていた。しかし、戦いの帰趨をどうみるかについては、市民の見方はまちまちだった。

民衆の士気が旺盛であったことはすでに述べた。“40万”の愛国的兵士が銃をとって待ち構えている。「一本角兜の連中よ、来れるものなら来い！」、と彼らは闘志を燃やしていた。だが、ブルジョアたちはやや穿った

38　*Ibid*., p. 80.
39　*Ibid*.

見方をしていた。すなわち、プロイセン軍にとってパリのような巨大都市の奪取はそう簡単ではなく、結局のところ和睦を求めてくるにちがいない、と。俄か仕立ての守備隊に信頼をおいていない彼らではあったが、さりとて、パリがそうやすやすと落城するとも考えなかった。

一方、専門筋の見方はきわめて単純明快で、悲観的予想の一本調子であった。すなわち、状況を甘く見てはいけない、これからは現実を直視しなければならない、パリが防衛に絶えうる状態になるまでにゆうに半年はかかるだろう、敵が城門を叩いている状況下では、防御工事はとうてい間にあいそうにもない――。ティエールにいたっては友人に向かって次のように放言していた。「パリは僅か8日間しかもたない、現状を見るかぎり、人がパリに期待できるのはそれがすべてであり、かつ、それで十分である」、と[40]。つい30年ほど前に首相の地位にあってパリ城壁の構築を命じた張本人ティエールにしてこういう調子であったから、他は推して知るべし。

このようにみてくると、明らかにプロイセン軍の判断ミスということになる。もし、シャティヨンの戦いで勝利をおさめたモルトケが機を移さず進撃していたならば、イヴリー、ヴァンヴ、モンルージュ、イシーの4つの外部要塞をほとんど無抵抗のうちに抑えることができたはずである。上記4要塞の全部とまではいかなくても、せめて1つだけでも制圧していれば、そこを拠点としてパリ進撃を容易におこないえたであろう。それどころか、外部要塞の陥落を知ったトロシュはすぐさま降伏に応じた可能性さえある。

パリは一枚岩ではなかった。最初から抗戦意欲のレベルにおいて大きな断層があった。トロシュが降伏すれば、ベルヴィル（民衆街区）はすかさず反乱行動に出たかもしれない。そこで、内戦を惧れるブルジョア穏健派はプロイセン軍を市内に引き入れ、これに憲兵の役割を与えたであろう。

だが、プロイセン軍もパリ政府のどちらも動かなかった。こうして9月

40　*Ibid*., p. 81.

中は小競り合い程度の交戦で終わった。民衆は政府の弱気に非難を集中したが、彼らの関心は“外部の敵”の動向に振り向けられており、それが“内部の敵”に転じるまでにはなお多少の時間を要した。

ビスマルクのファーヴルへの和平条件の提示はパリ市民の団結を固め、政府への信任を強める方向に作用した。「フェリエール会談」はこのように、国防政府にとって功罪相半ばするところがあったのである。

とにかく、プロイセン軍の待機戦術にトロシュ自身が首を傾げるほどであったが、そのことがまたパリ籠城が4ヵ月半も続く伏線ともなっていく。

第3章　シュヴィリーの戦い（9月30日）

第1節　突撃か、待機か

独軍は前にふれたように、マース軍と第3軍がパリ包囲に関わっていた。前者をプロイセン王太子、後者をザクセン王が率い、全体の指揮をモルトケがとっていた。包囲軍の総兵力は23万5千。彼らは森の中に野営し、あるいは塹壕の中に身を潜めていた。占領した村の道を塞ぎ、いたるところに堡籃墻と待伏せ場所を設置し、塹壕と通信壕を掘り、盛土の上にあらゆる口径の砲列を敷いた[41]。パリという、ひとつの広大な基地が四方八方に防備体制を築くのも大仕事だったが、これを遠巻きに囲い込む独軍もそれ以上の莫大な人的、物的、金銭的資源の動員を必須とした。

9月19日のシャティヨン戦で勝利をおさめた独軍は防備体制の構築に忙しく、当分、攻撃はないように思われた。しかし、よくよく見ると、独軍は動きを止めていない。日一日と包囲の輪を狭めていた。その直接の結果はパリ側が行動の自由を奪われたことであった。もしトロシュがここで何らかの軍事行動を、あるいはそこまでいかなくとも陽動ないしは牽制の作戦のふりでもしていれば、完璧な包囲網は敷くことができなかったものと

41　Dominique, *Op. cit.*, p. 89.

思われる。

工兵出身の老将トリピエ将軍はその専門の立場からトロシュの待機主義に疑問をもっていた。トリピエは籠城の初日から積極的防衛作戦の採用を主張して止まなかった。これを果敢かつ執拗におこなっていれば独軍は包囲を解いたはずである、と。シャティヨンの戦いから引き揚げてきたデュクロ将軍に向かっても同じ内容の発言を繰り返した。

「あなたの報復戦での支援をお許しいただけるならば、あなたはほとんどやるべきことはないでしょう。」

「私はシャティヨンを侮っていました。もし私がそこに戻ったら、プロイセン軍は私を押し返すでしょう。」

「それこそ、こちらの思うツボです。反転からこそ、ひとつのチャンスが生まれます。あなたはプロイセン軍をセーヌ川に追い落とせばよろしいのです。」[42]

デュクロ将軍は同意しなかったし、トロシュもむろんトリピエ案を無謀として退けた。

だが、シャティヨンでの敗北は政府首脳への痛撃となった。世論は緒戦の敗退について軍事指導上での誤りがあったのではないかを疑いはじめた。トロシュは早急に攻勢に出ることによって世論の信任を繋ぎとめる必要を感じた。

9月22日、師団長モーデュイはトロシュ総督にヴィトリーおよびムーラン＝サケ奪還のための出動の許可を申請してきた。トロシュは許可した。翌23日、モーデュイ師団はヴィルジュイフを陥れ、次いで、その西側オート＝ブリュイエールの角面堡を奪取。プロイセン軍はすぐさま反撃に出たが撃退された。日暮れまでにパリ軍の勝利が確定した。それは「シャティヨン」以降、最大の激戦であり、しかも、今度は紛れもなき勝利であり、

42　Dominique, *Ibid*., pp. 91-92.; Ducrot, le général, *La défense de Paris (1870-1871)*, E. Dentu, 4 vols, tome 1, p. 72.

パリ軍が適切な行動を起こせば突破も占領もできることを示す戦いとなった[43]。

トロシュは鼻高々だった。しかし、この軍事行動は総督の発意で起こされたものではなかったし、モーデュイ師団への支援行動を起こさなかった。そのため、孤立した同師団は消耗を早めた。9月30日、トロシュは同師団に進撃を命じたが、その命令は中途半端だった。すなわち、進撃は確実な勝機あるときにのみおこなうべし、という条件づきである[44]。

かくて、モーデュイは攻撃地点を絞る。彼が選んだのは、シャティヨン高地、ヴィルジュイフ高地から麓のセーヌ川まで広がる大平原であった。22日の戦闘によりパリ軍は高地全体を支配していた。モンルージュ、ビセートル、イヴリーの各要塞と、ムーラン・ド・サケおよびオート＝ブリュイエール角面堡からの援護砲撃を受けて進撃はスムーズに運ぶはずだった。平原は樹木が伐採され、家屋もないためにほとんど剥きだし状態であり、作戦行動は地形に左右された。モーデュイ師団はレイとシュヴィリーを制圧したのち、向きを変えてブール＝ラ＝レーヌとソーをめざし、19日の戦闘で失ったシャティヨン角面堡の側面を突くことになった。そこからは目前にヴェルサイユ街道が開けるはずである。しかし、勝利に懐疑的なトロシュ将軍はヴェルサイユへの進軍を認めなかった[45]。

30日の朝、夜の間にイヴリー、ビセートル、モンルージュの要塞の後ろに終結したパリ軍はレイ、シュヴィリー、ティエの村をめざし進撃を開始した。軍の中核はヴィノワ将軍驥下の第13軍団の総勢２万。めざす村にはプロイセン軍が駐屯していた。激戦ののち、ブレーズ大佐の軍団は一気にティエまで達した。第89中隊と第15狙撃大隊が民家を１戸ずつ奪取して前

43　Vinoy, Joseph, général, *Siège de Paris, Campagne de 1870-1871,Opération du 13 e corps et de la troisième armée*, Paris, Henri Plon, 1872, iii, 536p., pp.159-165.; Dominique, *Op. cit*., pp. 92-93.

44　Vinoy, *Op. cit*., pp. 188-189.

45　*Ibid*., p. 189.

進したのに対し、ギレム将軍率いる第35および第42中隊はシュヴィリーを一気に攻略。しかし、プロイセン軍の増援部隊が現場に急行し、パリ軍の総勢13個大隊に襲いかかった。予備軍の投入によって抵抗することができたかもしれないが、そのとき、パリ軍に退却命令が発せられた。かくて、第35中隊はシュヴィリー城の庭園に到達する寸前で攻撃を中止しなければならなかった。ティエではパリ勢はすでに砲台を占拠していたが、牽引装置をもってこなかったため大砲の捕獲は断念した。戦闘の最中にギレム将軍は戦死した。パリ軍の犠牲は甚大で、約２千が戦死または負傷したのに対し、ドイツ側は約４百が戦闘不能に陥ったにすぎない[46]。

しかし、慮外の急襲に遭った独軍はすんでのところで崩壊を免れた。パリ側が決定的ポイントで予備軍さえ投入していれば、この戦いで勝利を手にすることができたし、したがって、独軍の包囲網に重大な裂け目を生じた可能性があったのである[47]。

第２節　フルーランス

パリの興奮は凄まじかった。勝ちも負けも誇張して伝えられた。ある者はプロイセン軍に再起不能の大損害を与えたと豪語した。それに尾ヒレがついて、プロイセン軍はイヴリー要塞とシャラントン要塞の間でセーヌ河畔に追い詰められ、両要塞からの砲撃で殲滅されたという話さえ巷に流れた。さらに、プロイセン軍１万が投降したとも伝えられた。長く不安心理に苛まれていたパリ市民にとって願ってもない朗報であった。別のある者はパリ軍の単なる退却を大潰走として語った。戦った兵士たちがめいめい勝手に矛盾する現場報告をするものだから、それらを聞いた市民は、いったいパリ軍は勝ったのか負けたのかわからなくなる。しかし、目の前にい

46　*Ibid*., pp. 189-200.; Dominique, *Op. cit*., p. 93.

47　Dominique, *Ibid*.; Niox, général, *La Guerre de 1870, simple récit*. 15 e éd., Paris, Ch. Delagrave, [1896], 146 p., p.104.

るのは退却兵そのものであるため、結局のところ、「勝てた戦いを、無能な将軍のせいでむざむざ失った」という結論になった。パリは我慢するより仕方なかった[48]。

10月２日、パリはダブルパンチを浴びた。トゥール（ロレーヌ州のToul）とストラスブールが陥落したという知らせである。だが、市民はこれにも堪えねばならないことを知っていた。とはいえ、アルザス州都ストラスブールの落城の報知はさすがに堪えた。それまで毎日、コンコルド広場で続けられていたストラスブール像の周囲での宗教的、愛国的儀式は以後、途絶えてしまう。傷ついた市民の怒りの矛先はしだいに国防政府そのものに向けられるようになっていく[49]。

それにもかかわらず、男たちの士気は衰えず、街角で「武器をよこせ」、「前線に出たい」という声がしきりに続いた。10月の初め、トゥール（トゥーレーヌの州都Tours）に発つ直前にガンベッタ内相が出した政令は国民衛兵の現状を伝えた。それによると、国民衛兵がもつ銃は総計28万丁であり、既存兵力60個大隊のうえに、194個大隊が新たに編成されたとあった[50]。その兵力の値踏みについて評価は分かれるだろう。たしかに、訓練と規律が施されれば相当の戦力になる可能性はあった。しかし、雑多な要素から成るこの軍は、それが強大になればなるほど政府にとって危険な存在ともなった。政府が頼みとする兵力は義勇兵だったが、これも同じように訓練が必要であったし、武装の充実が急務であった。銃と兵だけでは戦さにはならない。弾薬が、それこそ無尽蔵な量の弾薬が、そして、歩兵突撃を支援すべき大砲が必要だった。市内のいたるところに火薬工場と臨時の溶鉱炉が設置された。さらに、兵員輸送のために乗合船が徴発された。この船が実際に使われることはなかったが[51]。

48　Dominique, *Ibid*., p. 94.
49　*Ibid*.
50　*Ibid*., p. 95.
51　*Ibid*.

シュヴィリーでの戦いを機に将軍たちの威信は地に墜ちた。それまでは城内平和の優先という名分の陰に隠れ反響を呼ばなかったスローガンが徐々に現実味を帯びるようになる。そのスローガンとは、今の政府に代えて「革命的独裁政権を樹立せよ」というもの。この統治下でこそ、何にもまして軍事優先の大原則が罷りとおるというのだ。人民が選んだ革命政府に奉仕する軍隊、兵士らによって選出される将軍たち――人々の胸中で蠢きはじめるのはまさしく80年前のフランス大革命の思い出であった。

左派勢力の活動が活発になる。彼らの要求は市議会選挙すなわちパリコミューンの樹立であった。ルドリュ＝ロランはクラブや街頭で、声を大にして選挙の早期実施を訴えた。政府にやる気がないならば、人民の手でこれを実施しよう、次の日曜か月曜あたりが適当だ、と[52]。ブランキ派のフルーランスもこの檄に呼応する。彼の新聞において、「血管の中で血がわれわれを沸き立たせ、土は足元でわれわれを焼く」と書く[53]。

10月６日から７日にかけての夜間、モンルージュ要塞の海兵隊が敵の輸送隊を襲い、白兵戦でプロイセン兵士80人を殺害した。ある者はこうした快挙こそわが兵士が倣うべきと説き、また別のある者はこの程度の勝利で満足してはいけない、いま必要なのは輸送隊の襲撃ではなくて怒濤の総出撃であり、これによってヴィルヘルム王とビスマルクを捕らえることだと力説する[54]。

10月の声を聞くと、さすがのパリ市民も焦れてきた。誤報と流言の繰り返しがこうした焦慮を悪化させた。一般に不安心理に根をもつ噂話というのは不吉なものが多い。オルレアン公がロワール川沿いで散歩していたとか、アンリ五世（ブルボン家）がブルターニュに上陸したとか、閣僚たちが反目しあっているとかという流言がそれだ[55]。

52　*Ibid*.
53　*Ibid*., pp. 95-96.
54　*Ibid*., p. 97.
55　*Ibid*.

パリと地方の間は気球と伝書鳩で細々と通信がつづけられていたが、鳩が首都に運びこむ地方のニュースにはいつも尾ひれがついて発表された。パリの新聞社で事実の確認のしようがないために、小さな出来事でも勝手な解釈でもって大袈裟に伝えられた。ある社が見込み情報を流せば、他社はそれをおし拡げた。実際の戦局は膠着状態にあるのに、地方のほとんどが独軍の支配下に入ったとか、抵抗軍は破滅寸前であるとかいう話。パリにとっての希望の星は地方軍の決起だったが、頼みとするロワール軍が敗退したという流言も飛び交う。

情報不足は市民相互間に猜疑心を育む。プロイセン軍がスパイをパリ市内に大量に侵入させたという話がひろまる。ジャーナリストたちはすぐにこの流言に飛びつき、スパイ探しに躍起となる。パリ軍の将校の妻が毎晩、密かにプロイセン兵営を訪れているとか、新聞配達人が敵に新聞を送り届けているとか、あげくの果てはパリの新聞社が敵に籠絡されているとかという話に発展する[56]。

日ごろ培われた競争心はこのとき、ライヴァル社への憎悪に転じる。『シエクル』紙はプロイセン軍と通じているとして『フィガロ』紙を非難する。口実は他愛ないもの。『フィガロ』紙が、地方の親戚からの便りをパリ市民に送り届けた者には1千フランを供与するという広告掲載を出した。プロイセン軍と共謀していないかぎり、実現不可能なことを堂々と述べるあたりが臭いというわけだ。『フィガロ』紙の編集者アルベール・ウォルフはヴェルサイユでプロイセン軍とともに堂々とフランス語の新聞を売っているともつけ加える[57]。

しだいに底を尽きはじめた食いものをめぐる話は既発表の拙論考に譲ろう[58]。じっさいのところ、この話がいちばん官民のあいだの相互不審を煽

56　*Ibid*., p. 98.

57　*Ibid*.; Roth, François, *La guerre de 70*. Paris, Fayard, 1990, 778p., p. 205.

58　松井道昭「パリ籠城下（1870-71年）の食糧行政」（『横浜市立大学論叢 社会科学系列』第41巻、第2号、1990年）

るのだが。

だが、ガンベッタの出立はこうした猜疑心とは無縁であった。ガンベッタがトゥールに向け飛び立ったのは10月７日だが（到着は９日）、この話は、パリ市民が久々に耳にする朗報としてパッとにひろまった。彼は国防政府閣僚のなかで大衆に最も人気のある政治家であり、彼がパリを離れるについては懸念や哀惜の情よりも、希望と勇気を振り撒く結果になった。彼はじきに大量の援軍を引き連れて首都に戻ってくるにちがいない、と。

大砲および武器・弾薬の製造が急務だった。それが決定的に不足していた。兵士も市民もこの遅延状況に文句をつけた。だが、努力がなされなかったわけではない。カイユー工場は全力を挙げて大砲鋳造に大わらわであった。リヨン鉄道とオルレアン鉄道の修理工場は砲架製造を担当した。臨時の作業場でその作業が困難を伴ったのは想像に難くない。砲架一つをつくるのに兵器廠でさえゆうに３ヵ月かかるところを、ドリアンは５日で作ることを要求したからである。ドリアンは砲架のみで満足しなかった。彼は市全体で日産２万発の砲弾製造を要求した[59]。あらゆる遅滞の因となる慣行、怠惰、ルーティンワーク、手抜かりを克服するのは容易なことではなかった。国民衛兵のための制服を担当した仕立屋は日夜の別なく働き、週に７万着を供給した[60]。

すべての要塞に投光器が設置された。ヴィクトル・ユゴーは、「何という美しさだろう。要塞が暗闇の中で吠えるのは！」[61]、と書く。政府はテュイルリー宮の銀器の溶解を命じた。それは象徴的意味をもっていた。ついで、テュイルリーの建物の壁面に共和主義の標語を描く作業が始まった。帝政の殿堂が共和主義と抗戦の祭壇になるために、こうした舞台装置は不

59　Assemblée nationale, *Enquête parlementaire sur les actes du gouvernement de la Défense nationale, déposition des témoins*, tome 1, Versailles, Cerf et fils, 1872, pp. 522-531.

60　Dominique, *Op. cit.*, p. 98.; Roth, *Op. cit.*, p.204.

61　Dominique, *Ibid.*, p. 99.

可欠であった。そのやさき、ジャヴェルの倉庫がとつぜん大音響とともに吹き飛んだ。すわっ、砲撃だ、とばかり皆が色めきたつ。狂騒が鎮まったとき、瓦礫の下から13の遺体が見つかった。原因ははっきりしないが、敵の砲撃でないことだけは確かであった[62]。

日曜で晴れの日には市民はトロカデロの丘に上った。そこには天文学者が設置した望遠鏡があった。10スーを払えば、それでもって地平線上にプロイセン軍の歩哨を望むことができた。ポワン・デュ・ジュールの方角に望遠鏡をまわせば、遠くに、橋を落とされたサン＝クルー橋が見えた。まだかなり強い陽射しの残る10月初旬、戦時下とは思えない長閑さがパリを包み込んでいた。しかし、冷気は霧の季節が迫っていることを感じさせた。地方から手紙が届かなくなってから久しい。手紙がなくても、郊外散歩の日曜日がなくなっても、それでもパリ市民はさほど不都合を感じなかった。プロイセンの砲撃は10月29日に始まるという噂が飛び交った。しかし、噂は毎度のことで、人々は驚かない[63]。

10月８日朝、とつぜん二、三方から砲声が響き渡った。ベッドから飛び起きたパリ市民は戸口に突進し、街路に飛び出した。どこで戦闘が始まったのか？　もくもくと沸き上がる煙以外、何も見えなかった。要するに、敵と味方の大砲の応酬にすぎなかった[64]。

10月８日、市役所前にデモ隊が現れた。コミューンを！の声が挙がった。3日前、フルーランス率いる一団がそこに現れ、解散するに臨んで、この日の午後２時に落ち合うことを誓っていた。1時半、1万近い大群衆が広場を埋めた。あらん限りの声でコミューン、コミューン！と叫ぶ。しだいに群衆の叫びは怒気を帯びるようになった。固く閉じられた市役所の窓に向かって罵声が飛ぶ。人波はさらに増えた、そのとき、正門中央の窓が開き、

62　*Ibid*.
63　Dominique, *Ibid*.; Roth, *Op. cit*., p. 204.
64　Dominique, *Ibid*., p.100.

フェリー、ロシュフォール、アラゴの姿が現れた。

群衆は鉄柵を叩きながら「選挙を！ コミューンを！」と叫ぶ。

広場は人波でびっしりとなった。国防政府の閣僚のひとりが何やらジェスチャーをした。何か喋りたがっているようすで、あらゆる目が一斉に彼に注がれた。しかし、周りの騒音に掻き消され、発言は聞き取れない。十字形の桟の窓はふたたび閉じられた。騒ぎは午後3時までつづいた。そのとき国民衛兵が現われ、銃剣で群衆をセーヌ河畔またはリヴォリ通りの方向に押しやり、すでに空っぽとなった広場の3辺に整列した[65]。

ファーヴル、ピカール、アラゴ、フェリー、シモンらが姿を見せ、国民衛兵の列に沿って並ぶ。そうすると、場末の労働者たちが立ち去った後に姿を現わした店主やブルジョアたちから一斉に拍手が巻き起こる。敬礼太鼓が鳴り響く。広場の真ん中で、閣僚たちは立ち止まり、ジュール・ファーヴルは国民衛兵の将校らを半円状に並ばせ、演説を始める。そのとき要塞の砲声が演説を中断させる。すると、ファーヴルは叫んだ。

「これぞ大砲の意見である。それはわれわれすべてに、義務がどこにあるかを教えているのだ！」

短いながら、雄弁家として名高いファーヴルならではの当意即妙の発言であった。それはその場に居合わせた人々の万雷の拍手を招く。急に降り出す雨、迫りつつある夕闇をものともせず、熱気が広場をつつんだ[66]。

事件の暴走を未然に防いだのは国民衛兵であった。「コミューン」を叫ぶ左派の登場、そしてその撤退した後に現れた身なりのいい人々、パリはまさしく分裂の兆しを見せる。城内平和の維持のための平行棒の役割を中流市民が果たしたのである。彼らはまだ政府に一縷の希望を繋いでいた。しかし、やがて無為のうちに過ぎていく時間はこの信任を先細りさせていくことになるが。

65　*Ibid*.

66　*Ibid*., p. 101.

パリ全体が兵舎となった。シャン＝ゼリゼの樹木の下はテントの列で占められた。月光に照らし出された三角布の近くのいたるところで炎が燃え上がる。かつての万国博覧会場たる工業館は野戦病院に転用され、入口で門番が監視していた。カルーゼルの泥だらけの石畳の上で繰り広げられる、遊動兵の演習に出くわすのも珍しくない[67]。

16区のポワン・デュ・ジュールまで行けば、今は刈り取られて無残にも木株だけが残っているブーローニュの森の向こうの明るい空を背景に、上部の欠けたピラミッドのように伸び上がるモン＝ヴァレリアン要塞の黒い影を望むことができる。時々、その丘は閃光とともに砲弾を吐き出すのだ[68]。外側のブルヴァール（環状大通り）に赴けば遊動兵が仮設兵舎の中で寝そべっているのが見られる。この通りの往時の浮かれた陽気は消え失せ、野営地そのものに変わっている。杭に繋がれた馬が思い出したように嘶き、地面を蹴って棒立ちになる。酒盛りの最中の兵士たち、うろうろ動きまわる遊動兵、討論と談笑に耽る国民衛兵など、華の都パリにまったく似つかわしくない光景がどこでもくりひろげられていた。時おり沸き起こる「マルセイエーズ」と「出発の歌」の合唱が兵士たちのてんでばらばらな行動をひとつのものにまとめあげる[69]。

第４章　休戦の企て

第１節　孤立するフランス

普仏戦争の推移はヨーロッパ諸国から熱い視線を浴びていた。戦前の予想では、無敵を誇るフランス陸軍が“新米の”プロイセン軍を前にかくも

67　*Ibid*., p. 102.
68　*Ibid*.
69　*Ibid*., pp. 102-103.

脆く崩れるとはだれも考えなかった。しかし、あにはからんや、戦闘の帰趨はスダンで大勢を決した。諸国政府はやがて外交活動の始まる局面を見越し、戦局の行方とともに諸外国がどう出るかについて固唾をのんで見守っていた。

パリ臨時政府は中立国の介入に期待をかけていた。 政府がアドルフ・ティエールを特命大使として諸国行脚の旅につかせたのはそのためである。何とかして仲裁を依頼し、フランスに不利にならない条件で戦争を集結させたいとの願いからである。

ビスマルクの懸念の中心は中立国の動向であった。戦争の帰趨は決したいま、これから収穫にとりかかろうとしたとき、もし中立国が介入すれば、これまでの努力が水泡に帰す懼れがあったからである。とくにオーストリアとイギリスの出方が心配だった。ビスマルクはパリ臨時政府とメッスのバゼーヌ軍、中立国、南ドイツ諸国というように全方向での情報収集に躍起となっていた。戦争の最中から同盟国の南ドイツ諸国の動静を探らなければならなかったのは、これら諸国の住民に動揺が生まれていないかを調べるためである。

クリミア戦争後の十年間にヨーロッパで3度の戦争がたて続けに起きた。すなわち、イタリア戦争、デンマーク戦争、普墺戦争がそれである。いずれも何らかのかたちでプロイセンの利害が関わっている。しかし、これらの戦争は期間と広がりにおいて限定されたものであり、敗れたほうも、それでもって国家が滅びることはなかったし、講和で戦勝国の意思がそのまま貫徹するわけでもなかった。そこに必ず仲裁国が現われ、講和条件が一方に傾くのを制止した。戦敗国はむろん、中立国も、時には戦勝国さえもがヨーロッパの均衡の崩壊を望まなかったのである。1848年の革命の衝撃で崩壊したとはいえ、ウィーン体制の理念はなお機能していたとみることもできよう。普仏戦争でもこうした力が作用するだろうか。

仲裁国の出現をフランス[70] は望み、プロイセンは疎んじた。仲裁国となりうるのはロシア、オーストリア、そしてイギリスだった。ビスマルクにとってロシアとオーストリアはまず心配なかった。懸念は大国イギリスの動向であった。ナポレオン三世の長年の親英政策が効を奏し、戦局の決定的段階においてイギリスがフランスの肩をもって介入しはしないかを気遣った。だからこそ、彼は戦争のこれ以上の拡大と長期化を望まず、フランスを早く和平交渉のテーブルにつかせたかったのである。

フランス側はその逆である。フランスが何とかもち堪えてさえいれば、俄か仕立てのドイツ諸邦軍に亀裂が生じること、消耗感を増した敵兵士が戦意喪失に陥ることに期待をかけた。なかでも中立国の介入を望んだ。しかし、フランスにとって問題なのはパリに革命が起きたことである。臨時政府の閣僚たちはいずれも帝政下で野党代議士の経歴こそもっていても、実際に政務をとった経験がなく現下の難局をどう切り抜けたらよいかわからなかった。失策は早くも「フェリエール」で露わになった。ファーヴルはこの場でつい本音を洩らしてしまったのだ[71]。ビスマルクがそれを見逃すはずもなく、フランスの降伏はもはや動かしがたい事実、時間の問題だと悟ってしまう。職業軍人たちは前線に出払っていて革命の過激化を防ぐ力にならなかった。かくて、新政府の閣僚たちはパリ民衆の圧力を直接的に受けるはめになる。さらに、この臨時政府の最大の弱点は非合法性にあった。この意識が頭から離れない閣僚たちは戦争指導で大胆な姿勢をとれなかった。臨時政府が憲法制定議会を招集する選挙の実施に拘ったのもあながち理由のないことではない。ファーヴルは合法化によって政府の足場さえ固まればボナパルト派の策動を断ち切れるし、列強から承認を取りつけ

70　ここで漠然と「フランス」というのは訳がある。当時のフランス人はパリの急進派と社会主義を除き抗戦意欲は乏しかった。パリ市民でも、“スダン”後において全部が全部好戦的であったわけではない。

71　ファーヴルは会見の席上、何度も「わが政権は本質的に臨時のものである」と繰り返した。Favre, Jules, *Gouvernement de la Défense national, op. cit.*, p. 178.

るのも可能になるであろうし、そうすれば後顧の憂いなくビスマルクと交渉できるものと考えていた。ビスマルクが帝政の残党[72] と交渉することをちらつかせ、和平条件を嵩上げするようなこともしないだろう、とも考えた[73]。

新政府にとってもうひとつの弱点は共和主義の看板にあった。列強はそれゆえに危惧をもちつづけた。当時、ヨーロッパでは1848年騒乱の苦い思い出が残っていた。二月革命から生まれたフランスの新政府をいち早く承認したのは、同じ共和政のアメリカ合衆国であり、イタリアとスペインがこれに続く[74]。だが、これら3国による承認の意味はせいぜいのところで、3国がフランスに敵対行動にでる懼れがないということに尽きた[75]。こうして共和主義の看板は仲裁の名乗りでを渋らせる方向に作用した。

ファーヴルが「フェリエール会見」を通じて悟ったことは、ドイツがその時点でまだ戦争終結を急いでいないということだった。和平条件の過酷さのなかにビスマルクの本心が隠されているように思えたのだ[76]。外国の新聞を見ても、諸外国は全体としてまだ形勢観望の立場を崩していなかった。そうこうするうちに包囲の輪が縮まり、イギリス、イタリア、オーストリアなど外国の大使や公使らは慌ただしくパリを離れ、トゥールに行っ

72　メッスに引きこもるバゼーヌとの交渉を指す。Favre, Jules, *Ibid*.,180.

73　ビスマルクに、フランスの2つの政府を相手取って交渉する心づもりはまったくなく、交渉相手の内部の敵対勢力を競り合わせることなどもまったく考えていなかった。彼はむしろ、相手国の分裂を懼れていた。彼が求めていたのは、交渉妥結後の諸条項を真摯に実行する安定的政府であった。足場のない者を相手どり、いくら輝かしい和平条件を獲得したところで、別の新政権が現われ、それを反故にしてしまえば、元の木阿弥状態になるのは火よりも明らかだったからだ。

74　Assemblée nationale, *Rapport fait au nom de la commission d'enquête sur les actes du gouvernement de la Défense nationale* N º 1416 C, par M. De Rainneville, Versailles, 1872, pp. 4-5.

75　Favre, Jules, *Op. cit*., p. 117.

76　*Ibid*., p.190.

てしまった。パリに残ったのはアメリカとスイスの大使だけとなる[77]。両国ともにヨーロッパの紛争への不介入を国是としていたため、パリで中立国を介してプロイセンと交渉する道は塞がれてしまった。

そこで、ファーヴル自身がトゥールに発とうとも考えたが[78]、思い直して自らの代理としてショードルディ伯爵を派遣した[79]。彼が和平交渉をおこなうことになった。しかし、伯爵に決定権を与えられず、交渉のもようを逐一パリに伝達し、そのつどパリから指示を仰ぐことになった。要するに、彼の役目は情報収集と事務管理にすぎなかった[80]。連絡方法は頼りない伝書鳩によってである。ひとつの仮定にすぎないが、もし外交に関して全権を帯びたファーヴルがトゥール派遣部にいてドイツや諸外国と交渉をしていれば、翌年1月28日の休戦協定が示すように、戦争の停止と続行が各地でバラバラといった状態は避けられた可能性が高い[81]。

パリは外界から遮断されていたため、地方諸県と連絡をとることさえ不自由した。戦争がダラダラと長引いた理由のひとつはここにある。それが回復するのは翌年2月の休戦協定成立後のことである。かくて、フランスの外交ルートは事実上の麻痺状態に陥っていたといってよい。このことは、プロイセン側がありとあらゆる情報を入手し局面打開に向けてフリーハンドをもっていたのと好対照をなす。

ところで、万事手探り状態のファーヴルを歯軋りさせたのは世論の動向である。ファーヴルはフランスの世論とパリの世論を別物と考える。前者には節度があり、物事を冷静かつ客観的に見る力があるが、後者は狂躁状

77　各国大使館がパリを退去したのは包囲完成の直前の9月18日のことである。Assemblée nationale, *Enquête parlementaire sur le actes du gouvernement de Défense nationale, op. cit*., tome 2, p. 1.

78　Favre, *Op. cit*., p. 221.

79　Assemblée nationale, *Rapport fait au nom de la commission d'enquête, op. cit*., p. 2.

80　Assemblée nationale, *Enquête parlementaire sur le gouvernement de la Défense nationale, op. cit*., tome 2, pp. 1-11.

81　Assemblée nationale, *Rapport fait au nom de la commission d'enquête , op. cit*., p. 4.

態にあって、「法外な決心を覚悟」[82]するような状態にあった。彼が考えるところは以下のとおり。

誇り高きフランス人は完膚なきまでに打ちのめされるのを恥と思うだろう。大多数の国民の本音は和平にある。負けと決まっている勝負では実戦のほうはいい加減に切り上げ主舞台を外交の場に移し、ここで本腰を入れて取り組むのが得策というもの。今が交渉にうって出るべき時であり、大破局にいたった後では遅すぎる。たしかに、新聞や街頭デモは勇ましい文句を並べたて徹底抗戦を訴えている。革命達成の立役者として勝利感に酔いしれる民衆が愛国主義と排外主義に染まることは理解できないことではない。けれども、それだけに彼らは四囲の状況を冷静かつ客観的に分析する能力に欠いている。だからといって、今、牙をむいた徒党の前で「和平」を口にすることは、「敗北」、「裏切り」、「降伏」を唱えることと同じである。「フェリエール」後の自分の不評判はそこから発する。だから、慎重であらねばならないし、しばらくは面従腹背の態度を維持しなければならない。

第２節　諸国の事情

ところで、中立国の動静はどのようなものであっただろうか。

このたびの戦争の決着いかんが直接に影響する国はオーストリア＝ハンガリーであった。しかし、この二重帝国は身動きできない状態にあった。まず、プロイセンが勝利すれば隣に強大な国家が誕生しオーストリアの脅威となる。また、オーストリアがプロイセンに味方してアルザス＝ロレーヌの割譲を支持すれば、ハンガリーの独立派を刺激することになる。普墺戦争で一敗地に塗れた気分からいえばフランスに味方したいところだが、

82　勝ち目のない戦争において徹底抗戦を主張することを指す。Assemblée nationale, *Enquête parlementaire sur le gouvernement de la Défense nationale, op. cit.*, tome 1, p. 355.

背後からロシアが睨んでいるもとでは自由に動けない。だいいち、敗北の痛手がまだ癒えていない自国に“兄弟殺しの戦争”を構える準備はない。こういうわけで、オーストリア＝ハンガリー帝国は普仏戦争の推移に並々ならぬ関心をもちながら、結局、中立を余儀なくされたのである。

イタリアの新生国家ピエモンテ＝サヴォア王国は普仏激突をどのように見ていたか。イタリアは、国を接しないプロイセンには直接の利害関係はなかった。プロイセンが勝利すればドイツ統一運動に弾みがつき、それがイタリアにも跳ね返ってくる期待がもてた。一方、イタリアにとってアンビヴァレントな存在である隣国フランスとの関係は微妙だった。つまり、強いフランスは、背後から再併合の機会を窺うオーストリアを牽制しイタリアの支持力となるという意味で頼もしかったが、経済的な権益を求め触手を伸ばしてくるかもしれないという意味では疎ましい存在でもあった。弱いフランスはまさにその逆となる。そこに迷いがあったのは確かであるが、結局、イタリアは中立を選択する。新生国家として内政に全力を注ぐべきときに、軽々しい介入は国家そのものを危殆に瀕せしめる懼れがあった。オーストリアが動かない以上、自国も動かないのが得策とみた。

次にイギリスとロシア。この両国がどう動くかによって局面を一変させる可能性があった。だが、ビスマルクの慧眼が「動くまい」と見抜いていたように、両国ともに最後まで動かなかった。

ロンドンはもともとプロイセンに好意的であった。今度の戦争でプロイセンが勝ちをおさめ統一ドイツ国家が誕生することは、列強どうしを競り合わせることにより大陸に覇権国を出現させないというイギリスの伝統的な外交原則に沿ったことになる。

ロシアはどうか。プロイセンとの友好関係はなお続いており、プロイセンを背後から突く可能性はゼロに近かった。それどころか、皇帝アレクサンドル二世は、普仏戦争への介入の動きを見せはじめたオーストリア皇帝フランツ＝ヨゼフを諫止したほどである。ロシアの危惧はプロイセンではなく、オーストリアの膨張であった。それゆえ、その抑止力となるプロイ

センの強大化は望ましかった。とはいえ、ロシアがプロイセンの肩をもって普仏戦争に介入する見込みはなかった。もしそうすれば、イギリスの介入を招いてクリミア戦争の二の舞を演じる危険性があったからだ[83]。このような事情から結局、ロシアも中立を維持することになった。

交戦国にとって見極めが難しいという意味で厄介なのは各国の世論の動向であった。独軍によるパリ包囲の輪が縮まるころ、イギリスの世論はしだいにフランスへの同情に傾きつつあった。オーストリア、ロシア、イタリアの世論も勝敗の行方が明らかになると、冷静さを失って自国政府の介入を叫びはじめる。

世論には、自国の国家的利害を慮る立場のものもあれば、敗戦国民への同情に促されてのものもある。感情に根をもつ世論というものは一般に不定形であり、急激に膨らんだかと思うと、次の瞬間には萎んでしまう。そして、敵に憎悪をぶつけた次の瞬間には味方の失策への悲憤慷慨一色となる。世論においては「英雄」と「逆賊」はほとんど背中合わせで、状況変化と適当な理屈さえあれば容易に立場が入れ代わってしまう。だが、世論を侮るばかりでは、とんでもないしっぺ返しに遭う。それがいつ、どんな事件をきっかけとなってその流れが急変し主権者に政策の大転換を迫る圧力となるかわからない。とくに新聞が怖かった。情報源として世論を動かす力が新聞に備わっていたからである[84]。

83　クリミア戦争のパリ講和条約で黒海の中立化と英国艦隊のダーダネルス海峡とボスポラス海峡の自由航行が認められた。ロシアはこれを快く思っていなかった。いつかは講和条約のこの条項を削除しようとの意図をもっていた。普仏戦争中のビスマルクが腐心したのは英露関係の緊張を高めないことであった。もし英露の鞘当てが生じれば、普仏を含む国際会議の招集は必至となり、この場を借りて列強の保証のもとに普仏和平にいたる道筋が定められる可能性があった。

84　ビスマルクは新聞を活用する術を心得ていた。彼は極力、プロイセン政府の意向と軍の動きを記者団に公表することにより疑念の矛先を逸らそうとした。記者発表にあたっては戦争の大義名分を維持することに躍起となった。主戦場がフランスであり、ここをドイツ兵が闊歩することはドイツによる侵略的な印象が残ることになる。ビスマルクが探し求めた戦争継続の名分は「恒久的平和のための保

ベルギーの世論はフランス贔屓の典型であった。『ランデパンダンス・ベルジュ（ベルギーの独立）』紙は外国でも読まれ、影響力をもつ新聞だったが、論調は共和主義のフランスに同調的であった。御しがたいとみたビスマルクはドイツの新聞諸紙をけしかけ、ベルギー攻撃をおこなった。こうした挑戦的な試みにレオポルド王はいたく動揺する。国王は9月4日付の紙面でこう述べた。

「ドイツ人はわれわれに不平を鳴らしている。彼らは、われわれがフランス寄りであると述べたてる。これは大きなまちがいというものだ。すべての思慮ある人々はベルギーでプロイセン寄りの意見を表明しているのだ。」[85]

9月4日といえば“スダン”の直後である。仏軍の多数の敗残兵や傷兵が国境を越えてベルギー内に雪崩れ込んだ。ベルギー人は彼らを匿い援助の手を差し伸べた。これがビスマルクの猜疑心を刺激した。レオポルド王は国民のこれらの行為を純粋に人道的なものであると強調した。ドイツ諸紙は攻撃の手を緩めない。それだけに、国王はベルギーがプロイセンに敵対的ではなく、それどころか親プロイセン的であることを何度も強調しなければならなかった。本当のところ、王は根っからのフランス贔屓であったが、戦争の帰趨がはっきりした以上、戦後の新ヨーロッパ政治地図に目を配らざるをえなかったのである。小国ベルギーの悲哀がそこにある。

もしベルギーに親プロイセンの新聞が存在すれば、ビスマルクはこれらをけしかけることはできたかもしれなかったが、残念ながらベルギーの新聞は、そのほとんどすべてがフランスに同情的であり、これらを黙らせることはドイツ当局にはできない相談であった。そこでビスマルクは国王を標的に選んだのである。国民のレオポルド王への敬愛の情が強く、国王の

証」であった。つまり、フランスから侵略の芽を積み取るため、ひいてはヨーロッパの安全のために、アルザス＝ロレーヌの割譲が必須であることを強調した。

85　Maquest. *Op. cit.*, p. 4.

必死の弁明はベルギー諸紙のプロイセン攻撃を鈍らせる効果のあることを十分読んだうえでの行動であった[86]。

第３節　ティエールの列強歴訪

誕生したばかりのパリ国防政府は閣僚中に外交に精通した人物がいないこともあって、当時の各国政府を取り巻く諸事情を知らない。よって“無手勝流”で外交に臨むことになった。ファーヴルは、帝政が崩壊したからには近いうちに列強の和平にむけての干渉が始まるものと見ていた。彼がとくに期待をかけたのはイギリスとロシアであった。介入に障害があるとすれば、フランスの新政府が共和政の、しかも臨時政府であることだった。両国首脳部に対し、この政府が信用するに足ることを証明しなければならなかった。そこで、彼は列強政府に代表を派遣してフランスの立場を説明し和平のための仲裁を依頼することを思いつく。

新政府閣僚で国際的に名の通った人物は少なかったし、この重大な使命を果たしうる人物は見当らなかった。かくて、閣外の大物政治家ティエールに白羽の矢が立った。ファーヴルは９月10日の閣議でティエールを指名した[87]。かつては七月王政の首相を２度つとめたことがあり、第二共和政下でも活躍し、第二帝政下では野党の頭目として活躍したティエールこそ、この役まわりにぴったりの人物であった。オルレアン派と目される彼が特命大使に任命されるならば新政府の共和主義の色を多少なりとも薄めることができるはずである。

問題は、ティエールがこの役目を引き受けるかどうかだった。彼は国防政府への入閣を断った経緯もあり、この大役を拒絶する可能性もじゅうぶん考えられた。当のティエールは非常に厳しい難局で主役をつとめることは断ったものの、端役ならば引き受けたほうがよいと思っていた。自分が

86　*Ibid*.

87　Assemblée nationale, *Rapport fait au nom de la commission d'enquête, op. cit*., p. 9.

フランスのために一肌脱いだとの実績をつくっておくことは、今後、訪れるかもしれない時機に主役として返り咲くための布石になりうると考えた。要請されるや否や、かれは二つ返事で引き受けた[88]。

早くも彼は9月13日、ロンドンにいた。ロンドンの新聞『タイムズ』紙や『デイリー・ニューズ』紙は戦争の進行状態と九月四日革命後のフランスの状況に並々ならぬ関心を寄せていたが、一貫してプロイセン贔屓の立場を貫いていた。ティエールは英国政府に慇懃に迎え入れられたが、交渉で得るものは何もなかった。政府が慎重な態度を崩さなかったからだ。首相グラッドストーンは、開戦責任は挙げてフランス側にあるとの態度を崩さず、ナポレオン三世の失脚を当然と見なした。仲裁については交戦国双方の合意が前提になると言った[89]。プロイセンに和平の意思がない以上、イギリスが仲裁に出ても何も実らないことになると言う。イギリスはプロイセンと敵対しても斡旋するつもりはないということだった[90]。かくて、フランスに同情的な世論のみが頼りとなった[91]。さすがに英国人の良識ある層は、帝政の戦争という重荷を背負わされた共和主義政府に同情し、住民の意思を無視したプロイセンのアルザス＝ロレーヌの割譲要求に批判的であった。だが、当時のこうした世論はまだ大きな力をもたなかった[92]。

ティエールは9月20日、ロンドンを発って帰国の途につく。パリが包囲されていたためトゥールに急行した。「私はトゥールで見出したのはパリからトゥーレーヌに来たという派遣部であったが、それは混乱の真直中にあり、ほとんど解決能力をもたないとみた。」[93] 同時に「フェリエール会見」

88　*Ibid*., pp. 9-10.; Assemblée nationale, *Déposition de M. Thiers sur le Dix-Huit mars*, Paris, Librairie Générale, 1872, 67 p., p. 3.

89　Assemblée nationale, *Rapport fait au nom de la commission d'enquête, op. cit*., p. 19.

90　*Ibid*,. p. 20.

91　*Ibid*., p. 19.

92　Masquest, *Op. cit*., p. 230.

93　Assemblée nationale *Enquête parlementaire sur les actes du gouvernement de la Défense nationale, op. cit*., tome 1, p. 21.

のようすを聞かされた。ビスマルクの強硬姿勢を耳にし一旦は怯んだティエールだが、全力を尽くしてみるという意欲は衰えなかった。彼は休憩1時間という慌しさで、妻と義姉、幾人かの従者を連れ立ち、モン・スニ経由でイタリアに入り、ミラノ、ヴェネチアを素通りしてひたすらウィーンを目ざした[94]。

ウィーン到着は22日。そのウィーンも素っ気なかった。応対に出たのは宰相ボイストとハンガリー首相アンドラシー。彼らとの会見から得たものは同情だけであった。ウィーンは局外中立の態度を崩さなかった。もし仲裁に出るとすればペテルブルグとロンドンが仲裁に乗りだすときに限られるということである。もしいずれかの国に仲裁の動きが出れば喜んでそれに参加するということだった[95]。この首脳会談のなかで、ロシアだけに仲裁に乗り出す可能性のあることが示唆されたが、懸念すべきは、ヴィルヘルム一世とアレクサンドル二世が叔父と甥という血縁関係にあることが障害になるだろうということだった[96]。別れの際にボイストとアンドラシーは、こんどの戦争の開戦直前に仏外相グラモンが仏墺同盟の可能性を摘み取ってしまった責任を詰り、あの件さえなければ現下の恐るべき戦争はありえなかったという余談を述べた[97]。

ティエールは9月28日にペテルブルグに到着し、10月9日まで滞在した。皇帝をはじめ、宰相ゴルチャコフや政府要人たちと会見した。応接態度はきわめて慇懃だったが、ティエールの懇請にもかかわらず、ロシアの領袖たちの心を動かすことはできなかった。すなわち、ロシアに参戦の用意はないし、和平交渉において領土割譲にせよ賠償金請求にせよできるだけ寡少になるよう協力はしようという態度だった。

94　*Ibid*.

95　*Ibid*.

96　*Ibid*.

97　*Ibid*.; Assemblée nationale, *Rapport fait au nom de la commission d'enquête, op. cit*., p. 28.

皮肉なもので、普仏開戦時にたまたまプロイセンに滞在中だったゴルチャコフは仏軍のドイツ進撃により帰国できなくなることを心配したほどだったが、今やプロイセンの圧勝を信じて疑わなくなっていた[98]。ティエールが危惧した普露同盟の可能性はないようだったが、ツァーと普王との血縁関係が不気味だった。もしヴィルヘルム王が敗北するようなとき、ツァーは王に味方して参戦するというような個人的密約があったらしい[99]。ロシアが依然として同盟国を誘って「クリミア」の宿怨を晴らそうとするとき、同盟国となりうるのはこのプロイセンをおいて他にないと信じきっていた。ロシアがフランスを嫌う理由のひとつに、現在の臨時政府が合法性を欠き、いつ倒れるかしれない危うい存在であることだった。この政府はかつてのフランス革命の亡霊にすぎないのではないか、と。ツァー政府の気に入らないのはガンベッタとフロケであった。前者は急進主義の旗頭であり、後者は、ツァー（アレクサンドル二世）暗殺未遂事件の首謀者ポーランド人ベレゾフスキーの弁護人という経歴をもっていた。彼らがフランス新政府の首脳部を占めているのだ。

ゴルチャコフが勧めて言うには、すぐにヴェルサイユに赴いてプロイセン政府から有利な和平条件を引き出し、パリに名誉ある開城の道を用意することだ、ヴェルサイユはティエールの来訪を待ち受けているはずだ[100]、と。ティエールは、自分は講和条約締結の権限をもたない、パリの承認を得ないでヴェルサイユへ赴くこともできない[101] と答えた。ゴルチャコフは言葉を継ぐ。まずパリへ行き、交渉権限を帯びてヴェルサイユへ行きなさい、ツァーはプロイセン王宛てに、ティエールにパリへの通行許可証を与

98　*Ibid*., p. 30.
99　*Ibid*., p. 31.
100　Assemblée nationale, *Déposition de M. Thiers sur le dix-huit mars, op. cit*., p. 22.
101　Ibid., ; Assemblée nationale, *Rapport fait au nom de la commission d'enquête, op. cit*., pp.34-35.

えるよう書くだろう[102]、と。

これ以上の交渉は無意味と悟ったティエールはペテルスブルクを辞去し、来た道を引き返しウィーン経由でフィレンツェに向かった。建国してまもないイタリア王国でもティエールは歓待された。国王と閣僚たちはおしなべてフランスに同情的だったが、フランスのために敢えてプロイセンを敵にまわして戦う用意のないことは明らかだった。然るべき和平交渉時には「領土割譲なき和平」を主張するだろうということだった[103]。

ティエールがトゥールに戻ったのは10月21日、パリを出発してから40日が経っていた。旅行目的は何ひとつ達成されていなかった。しかし、各国ともにフランスに同情的で早期和平を望んでいること、領土割譲を伴う講和には反対であること、また、選挙延期にも反対であるという点で一致していた。すなわち、火急速やかにフランスを代表する新政府を樹立し和平交渉に臨めということだ。ただ、イギリスだけは例外で、状況の緊急性に鑑み現国防政府のもとで交渉条件がフランスに不利にならないうちにすぐに休戦協定を結べ、選挙はその後でもかまわないのではないかとの見解だった[104]。

各国がフランスに同情的なのは、プロイセンがあまりにも一方的に勝利した結果、アルザス＝ロレーヌの割譲が現実性を帯びつつあり、ヨーロッパの均衡が大きく崩される懼れが出はじめたからである。これ以上の変化を望まないという点において一種の中立国同盟が結成されていた。ティエールは査問委員会で「かくて私は、来るべき休戦協定交渉においてフランスの代表であると同時に中立列強の代表ともなるでしょう」[105]、と陳述している。

要するに、中立国を相手とする外交上のカードは何も残っていなかった。

102　*Ibid*., p. 35.
103　*Ibid*., p. 37.
104　*Ibid*., p. 39.
105　Assemblée nationale, *Déposition de M. Thiers sur le dix-huit mars, op. cit*., p. 23.

理由は3つ考えられる。

第一に、臨時政府が国際的にまったく信用されていなかった。とくに共和政は“憎まれっ子”であった。

第二に、フランス側に仲裁国を誘い出すいかなるバーゲニングパワーもなかった。すなわち、多くの要求項目を掲げるフランスは仲裁行為の代償として差し出すべきものを何も用意していなかった。

第三に、かつて仏外相タレーランが依拠した状況が当時はまったく見当たらなかった。ウィーン条約は敗戦国フランスに概ね穏やかな裁定をしたが、それというのも、戦勝国の利害が錯綜対立していたからである。タレーランは戦勝国どうしを競り合わせることによって、フランスへの要求の切り下げに成功した。このような要素は1870年の時点ではまったく見当たらなかった。

ティエールはもはや直接敵と交渉するしかないと悟った。ファーヴルより自分のほうが外交巧者だと自認していた。アルザス＝ロレーヌを手放さずして講和を取りつけることはできないことを裏返しに言うと、これら両州の失陥させ覚悟すれば和平はできると睨んだ。メッスの抵抗も終わりが近いこと、バゼーヌの投降はボナパルト派の挽歌となることも。ティエールはトゥールのガンベッタに自分の胸のうちを明らかにしたが、ガンベッタはあらゆる交渉に反対だった。そこで、ティエールはパリ政府とかけあうためパリに戻ることを思い立った。

ティエールはその後、パリとヴェルサイユへ行くことになるが、それをみる前に、ティエールが諸国行脚をしているときのパリ政府による交渉の動向をみておこう。

パリのトロシュとファーヴルは独自に和平を模索していた。パリとヴェルサイユのあいだを仲介したのはアメリカの軍人フォーブスとバーンサイドである。彼らは自らの意思で斡旋を思い立ったのであった。ファーヴルらがプロイセンに申し入れた内容は次のとおり。

(1) アルザス＝ロレーヌを除く総選挙実施のために48時間の休戦の締結。

(2) パリがこの期間中、地方と連絡をとりうること。

(3) 議会をトゥールに招集すること。

(4) 付帯条件の協議のために今後、交渉継続の余地を残しておくこと[106]。

ビスマルクは上記の4番目について、「国防政府が拒絶する場合にはパリ包囲の続行以外になし」とだけ言って返してきた。

10月13日のパリ政府の閣議でこれが議題の中心となった。面々は、相手の強硬姿勢に侮辱された印象をもった。ロシュフォールをはじめアラゴ、ガルニエ=パジェスらは皆、交渉の続行に難色を示した。トロシュ首相も、相手のもち出す条件を「大量殺戮の条件」だと言って交渉の打ち切りを主張した。ピカールだけが、威信問題で交渉を打ち切ってしまうのは後々のことを考えると望ましくないという異論を述べた[107]。

アメリカの善意で始まった交渉はかくて頓挫した。ここではっきりしたことは、プロイセン政府はよほどの好条件でしか和平交渉に応じる用意のないこと、そして、なによりもパリ政府を軽侮しているという事実だった。

ティエールがこの間の経緯を知るのはパリに戻ったときである。彼は諸国行脚の途中、祖国フランスの置かれた状態をその目で確かめていた。この1か月間に状況はますます悪化の一途を辿っていた。「トゥールに到着したとき、私は、平和を求める人々によって慇懃かつ歓喜をもって、その一方では、状況に引き摺られるまま徹底抗戦に関わらざるをえなかった人々によっては無愛想な態度で迎え入れられた」[108]、とティエールは語る。それほどに混乱していたということである。

ティエールは派遣部の面々に対し訪問先での状況を報告した。派遣部に

106　Sorel, Alfred, *Histoire diplomatique de la guerre franco-allemande*, 2 vols, Paris, E. Plon, 1875, xi+428 p., 452 p., tome 2, pp. 13-14.

107　Assemblée nationale, *Rapport fait au nom de la commission d'enquête, op. cit.*, p. 40.

108　Assemblée nationale, *Enquête parlementaire sur les actes du gouvernement de la Défense nationale, op. cit.*, tome 1, p. 23.

いて各国との折衝を続けていたショードルディも同席した[109]。彼はイギリス提案の休戦協定案について説明した。派遣部は原則的に休戦協定を結ぶことに異論はなかった。そのためには先ずパリの意向を確認し、同意を得ることができればプロイセンと直接交渉したほうがよいという結論になった[110]。

第４節　ビスマルクとの直談判

ティエールはパリに戻った。幸いロシア政府から貰った通行証が役に立ち、プロイセンの前線を通過することができた。ティエールは検問所でヴェルサイユ経由でしかパリに入れないことを通告され、一旦、プロイセン大本営に行きビスマルクとも会っている。しかし、自らの使命と目的を伝えただけで、和平交渉に関わることは話していない。ビスマルクはそのときティエールにメッス開城を告げ、ヴェルサイユ再訪問を要請した[111]。

セーヴル経由でパリに到着したのは10月30日。ちょうどそのころメッス落城のニュースが伝わり、パリに一騒動起こりそうな不穏な空気が立ち込めていた。

その日の夜遅くに外務省で開催された閣僚会議でティエールは歴訪の結果を伝えた。すなわち、ヨーロッパ諸国はいずれも仲裁に乗りだす用意がないこと、もはやパリ政府による直接交渉しか残されていないこと、地方は総じて和平に賛成であること、交渉が遅れれば遅れるほど和平条件が厳しくなることなど、を。政府閣僚たちは、国際情勢はもちろんだが、歴訪を通じてフランスの地方を見てきたこの大物政治家の目撃談に耳を欹てた。考えてみれば、籠城40日後のパリが外部情報を直接、談話のかたちで

109　ガンベッタは同席しなかったし、ティエールのトゥール滞在中に会ってもいない。それだけ両者は政治的立場を異にしていたということだろう。

110　Assemblée nationale, *Enquête parlementaire sur les actes du gouvernement de la Défense nationale, op. cit.*, tome 2, p. 3.

111　*Ibid.*, tome 1, p. 23.

聞くことはなかったからだ。ティエールはとくに地方諸県の痛ましいようすを強調した。

「すべての者が休戦を求めている。なぜなら人々は次のように感じているからだ。すなわち、パリの抵抗とは単なる食糧補給問題にすぎないこと、スダンとメッスで壊滅してしまった軍隊からは何らの救援も期待できないこと、ロワールで軍改革が模索されているが指揮官と軍需物資を欠いた状態では無意味であること、それゆえ、こうした不幸の連続に終止符を打つ必要のあること、休戦協定を先ず結べば和平への道は遠くないこと、を。」[112]

ティエールの見解は会議を圧倒した。ファーヴルはティエールに向かい、一刻も早くヴェルサイユに赴きビスマルクの意向を確かめるよう要請した。ティエールに付託された権限は曖昧なままであり、とりあえず相手の条件を聴くという程度であったようだ。「全員一致」の閣議決定として政府は翌日の『官報』にその旨掲載することも併せて決めた。翌朝、この報に接したパリは沸騰し、10月31日事件を誘発することになる[113]。

31日のパリは騒動に明け暮れしたため、ヴェルサイユへ行くのはためらわれた。結局、ティエールがパリを離れたのは翌朝の2時、寸刻も疎かにできないという思いからそうしたのである[114]。

112　*Ibid*., tome 1, p. 24.

113　事件そのものについてここではふれない。だが、ドイツと交渉するという政府発表のみは検討する価値がある。なぜなら、それがいかにも弁解じみており、自信なさげであり、公衆の不審を誘うのに十分な理由があったからである。『官報』は述べる。すなわち、「ここで問題となっている休戦協定はけっして和平交渉の開始を意味しない。それはきわめて限定された目的のみを有する。すなわち、フランスが自らの運命を決定できるようにするために議会を招集するという目的がこれである。…それまで国防政府は、政府自身が世界の前に高らかに宣言してきた政策をまったく変更する意思がない。フランスで選ばれた人々は厳かにその政策を批准するだろうことは疑う余地がない。」Cf. Georges-Roux, *Op. cit*., p. 234.

114　Assemblée nationale, *Enquête parlementaire sur les actes du gouvernement de la Défense nationale, op. cit*., tome 1, p. 25.

ヴェルサイユに到着し、さっそくビスマルクとの会談に入った。あまりに早くヴェルサイユに戻ってきた相手をみてビスマルクは、目の前にいる交渉相手が全権委任を帯びていないことを察知する。諸々の情報を総合的に判断し、和平交渉に入る状況がまだ熟成していないことは明らかだった。ビスマルクは多種多様な情報を手にしていたのである。そして、前日のパリにおける騒動もビスマルクとティエールの交渉に大きな影を落としていた。慇懃なやりとりから始まった交渉はすぐに座礁することになる。しかし、話し合いそのものは4日間続いた。ティエールは和平のための手順を次のように提案した。

まず、和平会談に入る前に25日間の休戦協定を結ぶ。

第二に、この間にフランスは国民議会を招集し、和平交渉をなしうる合法的政府を樹立する。

第三に、期間中、パリに食糧を補給する

ビスマルクは選挙の実施そのものについては賛成し、占領地における選挙すらも保証した。しかし、占領地での選挙においては旧帝政の官僚や議員を含め、いかなる者からも選挙権を剥奪してはならないとの条件を付け加えた。ティエール自身に異存はなかったが、トゥール政府が懸念を示すであろうと述べた。ビスマルクはパリの糧食補給についてはドイツの軍部から反対がもちあがるだろうと述べた。事実、そのころバゼーヌの裏切りを激しく非難するガンベッタの檄が世論に向かって徹底抗戦を訴えていたが、これがプロイセン軍部をひどく苛立たせていた[115]。それは、フランスが和平を求めていない証拠でもあった。パリが休戦を求めていないことも10月31日事件で赤裸々に示された。モルトケは、パリへの糧食補給は戦争の長期化をもたらすだけだとしてこれに反対した。もし妥協するとすれば糧食補給と交換に、パリを眼下に従えるモンヴァレリアンやその他の要塞

115　Assemblée nationale, *Rapport fait au nom de la commission d'enquête, op. cit.*, p. 49.

の明け渡しを要求した[116]。

この会見でもうひとつ話題になったことがある。それはアルザス＝ロレーヌの割譲と賠償金の問題だが、上にみたように論点が休戦のための条件に集中したために、仄めかし程度で大きく進展することはなかった。ビスマルクは、両州はもともとドイツの領土であり、それをかつてルイ十四世が併合したのであり、それを返還するのは当然だと述べた。賠償金は20億と30億フランに分けて支払うものとするという内容である[117]。

要するに、この時点では両陣営に戦争続行を望む勢力が根強く残っており、それが和平への障害となることは明白だった。パリへの食糧補給と引き換えに近傍の要塞を独軍に明け渡すなどといったことはとうていできない相談だった。ティエールもビスマルクもめざすところにそれほど大きな差があったわけではないが、状況からいって和平条件が熟していないという点で一致した。両者の会見は和平交渉を実らせることはなかったが、両者間に交わされた尊敬と信頼の感情は来るべきパリコミューン処理において実を結ぶことになる。

ティエールがパリに戻ってきた。11月５日の夜、手配どおりセーヴル橋の傍らの廃屋でファーヴルと落ち合った。なぜセーヴル橋かといえば、ティエールはヴェルサイユでの交渉のもようを報告し、併せて政府から最終的の指示を仰いだのち、再びヴェルサイユに急行するためである。デュクロ将軍もその会談に同席。ティエールはフランスが代償を払うことなしに戦争を終結させることは不可能であることを力説した。ファーヴルはパリの状況を説明した。協議の結果、現下においてパリを開城するのはむりであり、したがって、和平交渉はこれ以上進展する見込みなしという結論に達

116　Assemblée nationale, *Enquête parlementaire sur les actes du gouvernement de la Défense nationale, op. cit*., tome 1, p. 26.

117　Margueritte, Paul et Victor, *Histoire de la guerre de 1870-1871*, Paris, Hachette, 1914, vii, 293 p., p. 141.

した[118]。

ファーヴルとデュクロはパリに戻り政府の他の閣僚に意見を求めたが、現下の状況で和平条件の受諾はむりだということになった。プロイセンが最終的に認めたのは「補給なしの25日間の休戦」だけであって、これでは何もできないだけでなく、軍事的にみてプロイセンの包囲網を縮めさせる結果となる。パリが和平提案に承服すれば話は別だが、パリ市民は戦争の打撃が感じられないかぎり、あらゆる交渉を排撃するだろう。それに、徹底抗戦の姿勢を崩していないガンベッタがトゥールにいる。彼はパリ政府の意向と正反対の立場をとり、配下の官吏を通じて徹底抗戦の中身をもつ至急報を外国に送りつづけていたのである。[119]

ティエールは一旦ヴェルサイユに行き、交渉打ち切りに関するパリ政府からの電報を待ち受け、それをビスマルクに渡すと、そこを発ってトゥールに向かった。途中、オルレアンとトゥールのあいだで戦闘が再開されているのを目撃する[120]。派遣部はトゥールからボルドーに移っていたが、ここでガンベッタとの関係が微妙になり、自分がここにいること自体が政務の妨げとなると悟り、しばらく身を隠す決意をした[121]。その口実は、和平に向けての住民の意向を確かめに南仏に向かうというものだった。

南仏では多くの新聞が、領土の失陥につながる和平に賛成できないことを書きたてていた。王党派とカトリックだけが戦争の遂行に悲観的であった。『アンパルシアル・デュ・フィニステール』紙は「プロイセンから名誉ある講和を獲得するというあらゆる希望を放棄しなければならない」と

118　Assemblée nationale, *Enquête parlementaire sur les actes du gouvernement de la Défense nationale, op. cit.*, tome 1, p. 27.

119　Assemblée nationale, *Rapport fait au nom de la commission d'enquête, op. cit.*, pp. 50-52.

120　Assemblée nationale, *Enquête parlementaire sur les actes du gouvernement de la Défense nationale, op. cit.*, tome 1, p.27.

121　Assemblée nationale, *Rapport fait au nom de la commission d'enquête, op. cit.*, p. 57.

述べた。もはや絶滅にいたるまでの徹底抗戦しか術は残っていない。二枚舌を残忍の極みに結びつける敵との間で、高貴なフランスが取るべき道はこれしかないのだ」（11月19日）。

21才以上40才までの未婚男子と子どもを有する寡夫の即時動員が決まったが、この徴兵除外規程が悪用され、徴兵逃れのための俄か結婚がブームとなった。つまり戦意は萎えていたのである。

スダン陥落から２ヵ月たっても国際情勢に変化はなかった。いかなる国もフランス側に立って事を構える気はなく、またいかなる国も仲裁にうって出ようとしなかった。フランスの孤立化のお膳立てづくりに全力を尽くしてきたビスマルクはこの意味で完勝をおさめたのである。また、戦時下におけるフランスの体制変化すなわち革命は同国の重荷となった以外、何ももたらさなかった。

仏独の交渉は暗礁に乗り上げ、戦争が続くことになった。フランス側の望みの綱は奇跡、総動員と徹底抗戦による奇跡のみであった。外国の観測筋は、それはあまりに無謀であり、フランスは早晩降伏せざるをえないと見なした。

［つづく］